岳は神の力を以てしても、到底突破することが出來なかつた。

湖の主である犀龍にはいとも美しい一人の娘があつて、穗高見命との間には子を儲けてゐた。それは白龍太郎とも泉太郎とも呼ばれた英雄であつた。

母の犀龍は穗高見命が湖水を乾して、この地に、安曇族の鄕土を創めようといふ希望を抱いてゐることを知つたので、命の希望を達せしめるために、ある日、子の白龍太郎を乘せ、蛇龍となつて風を起し雲を呼び、日境の間から隘路を蹴破り、遠く越海の海に出で湖水を北海に導いた。

それがために湖底であつた松本、安曇の兩平野が始めて現れるに至つた。それから川の名を犀川と呼び、白龍太郎が出發した地を犀乘澤といひ、信濃川の日本海への川口たる新潟を沼垂と呼ぶに至つた。沼垂とは湖の水が流れる所の意味であり、騎つたりの訛りである。と傳へられてゐる。

白龍太郎の住んだ岩穴は、今は北安曇郡常磐村の佛崎の半腹にあるが、地主の神として地方人の崇拜は殊に深い。

公安さま（穗高岳）

曉春である。

新綠に燃えたつてゐる安曇野一帶には豐に醸される五月の陽光が溢れてゐた。

その杜と農家とにつゝまれた山麓の村々が、疲れ切つたものうい微風に眠つてでもゐるかのやうな靜かな午後のことである。

穗高岳から、色あせて、ところ〴〵にはつゞれさへ見える衣をまとうた老僧が、杖をたよりに下つて來た。夕方頃、穗高村（今の穗高町）にたどりついた、年はもう五十路もすぎてゐる、長い間、山々にこもつて修行したらしい聖人の外貌には犯すことの出來ない氣品があつた。日燒した厚い唇からは『願生偈』を誦ずる低い聲が途切れ〳〵に聞かれる。

老僧は村の辻堂に一夜の宿を求めた。

それが緣となつて辻堂の僧と旅僧は念佛の話に幾夜をもあかした。滯在をすゝめられるまゝ

に、旅僧は日毎に附近の村々を托鉢しては夜の宿りをこの辻堂に求めた。

かうして、いつか夏も過ぎ爽かな初秋の頃となつた、月の明るいある夜のこと、二人の僧は辻堂の縁先でまたもや念力冥加の話にふけつてゐた。

澄みわたつた空には無數の星がきらめいてゐた。輕い、白雲がさらさらと流れてともすると肌寒い風が衣の袖を撫でていつた。

旅僧は浮世をすてゝ山にこもつたが本當のさとりを得ないことを淋しんだ。流轉の世にあることを悲しんだ、そして、生きながら自分を墓に入れて葬式してくれと頼んだ。

旅僧の眼から涙がとめどなく膝に落ちた。辻堂の僧がなぐさめても、村人が集まつて來てとゞめても旅僧の決心は堅かつた。

『御坊、おのぞみを叶へまする程に御身のほどを語られよ。』

『わしか、わしは京の——高貴の者ちや、が、聞いて下さるな浮世のことは。』

旅僧はそれ以上語らなかつた。

どうにも止めることの出來ぬ旅僧の決心は村人によつて叶へられた。

墓は掘られた。棺から青竹の管が通されてわづかに呼吸を通はせた。別れを惜む村人にさびしい思ひを殘して旅僧は棺に這入り、地下に埋められた。人々は香をさゝげた。地中からは讀經の聲がかすかに洩れた。

七日目の夕——穗高岳の眞紅な夕燒け空が流れる頃、讀經の聲も遂に絶えた。

ありし日の旅僧の徳を慕うて墓の傍に堂が建立された。それが今も穗高町常盤町附近の墓の中にあつて公安さまと呼ばれてゐる。

が、旅僧の身分はわからぬ、名もあかさなかつた、どこの山々にこもつて修行したかもいはなかつた。そして、いつの時代のことか傳說に詳でない。

お玉柳（穗高岳）

穗高山麓の穗高町と南穗高村との境、犀川べりに程近い田圃中に古ぼけた名ばかりの祠が取殘

された様に立つてゐる。側には餘り太からぬ柳の一本が寂しげに風にゆられてゐる。村人はこれを『お玉柳』と呼ぶ。美人お玉にまつはる奇しき傳説の記念である。

それはいつの頃のことかわからぬ。いづこの者かも知れぬが、この近くにお玉と呼ぶ乙女が住まつてゐた。この邊一帶の地は極最近まで打つゞく柳林で南穂高村の中には重柳と云ふ匿名さへ殘つてゐる程である。村人はこの柳林を開墾しては田畠となし生活をたてゝゐた。ある年の春、近くの村人は共同して、冬の中に伐り採つた柳の根株を掘かへしては開墾してゐた、お玉も其中に交つてゐた。

身なりこそ汚けれ、鄙には稀な彼女の美貌に魅かれ、村の若人達は戯つて、その開墾事業に努めた。けれど、彼女は殆んど一言も口を訊くことがなく、ひたすらに仕事に勵んだ。そして開墾の人達が晝食をすまし、午睡の夢を結ぶ時も、お玉は、孤り遠く離れた柳の樹蔭に憩ふのを常とした。

若い人々は幾ら氣を揉んでもどうにも仕様がなく自ら供はつた彼女の氣品に打たれて冗談

口一つきくことさへ出來なかつた。

ところが或日のこと皆晝寢をすませて、仕事にとりかゝる頃になつても彼女の姿が見へなかつた。一時たつても二時たつても彼女は姿を見せなかつた、開墾の人達の胸は一樣に曇つた、誰云ふとなく仕事の手を休めて腰を下した。今日が今日迄誰よりも早く仕事にとりかゝつてゐた彼女が二時の上經てもまだ來ないといふことは、彼女の身邊に何事か變事が起つたにちがひないと云ふ事は誰にも容易に想像が出來た、村人の足は期せずして彼女がいつも午睡の夢を結ぶ柳の木の下に向つてはこばれた。

おそらく、其のことについて今の世の人に語るなら『なんだ莫迦々々しい』と一笑に附するであらうが傳説に依ると、村人の驚きは非常なものであつた。美しく清淨そのものゝ權化であつたかのやうな、彼女は何と云ふ神の惡戯か長さ四五尺もある蛇に見込まれ既にこの世の人では無かつたのである、蛇と彼女の死――それから美しい彼女を喪つた村の若人の絶えきれぬ憐み――それは三題話にしても餘りに出來過ぎてゐる。

それから後、そこら一帯はすつかり開墾されて美田が開けたが、お玉と蛇の心中した柳の木だけは殘されて今に及び傍にさゝやかな祠が建立された、柳は今もなよ〳〵と風になびいてゐる。娘の黒髪のやうに――。

若宮明神（穂高岳）

穂高岳山上にある穂高神社は神名式名神大本社で、瓊々杵尊、穂高見命を祀つてゐるが里俗には物草太郎君と稱へてゐる。

これは『物草太郎物語』の中に『殿――物草太郎は、おたかの明神（穂高の誤りであらうか）とあらはれ、女房は、朝日の權現とあらはれ――』とあるのによつたものらしい。

今は、穂高神社、社頭の末社若宮明神に物草太郎を祭るといひ、後背にある塚が物草太郎の塚と云ひ傳へてゐる。

『信府說記』によると、文德天皇の御代、信濃國にゐられた仁明天皇の御孫信濃中將と稱する人

が穂高神社を造營した、これこそ俗に物草太郎と稱へた人であつたと記されと居る。

さらに『物草太郎物語』には、昔、二位の中將でおはした人の、信濃に左遷され給ひしが、子なきを憂ひられ、善光寺の如來に祈られ、一子をまうしうけられた、後にその子を物草太郎として育てられたが太郎が幼少の時に父母ともに逝くなられたので、筑摩郡あたらしの鄕といふ所の里人に養はれて成長した。

その後――その里のながぶといふに雇はれて都に上つた。信濃に歸る時、京都の美しい女を連れて行かうと清水のあたりをさまよつて居る時、侍從の局といふ美しい女房を見そめた、遂に女房となし信濃に歸り百二十年の長壽をたもつたと書いてある。

だが、物草太郎の有名になつたのはお伽草子に書かれたからで、次のやうな物語である。

信濃の筑摩郡に不思議な男があつた。その名を物草太郎と云つた。とても、物ぐさがる男で美しく立派な家や庭をつくればいゝとは思つたが面倒なので竹を四本たて、こもをかけてその中に住んで居た。

仕事もせず、食べ物もないので寢て居ることが多かつた、そのかわり足のあがゞり、のみ、虱などが身體に出來た。

ある時、情けの深い人が大きな餅を五つ呉れた、太郎は喜んで四つを一度に喰べた、殘る一つはとりすべらしたので道にころげてゆつた。

が、取りに行くのは面倒である。人が通れば取つてくれるであらうと待つて居た。けれど、三日の間人が來なかつた。犬やからすが餅をとりに來ると竹の棹で追ふた。

四日目の朝、地頭の左衛門尉が五六十人の家來を連れて通行したので、太郎は云つた。

「すみませんが餅を取つて下さらんか。」

左衛門は知らぬ振をして通りすぎやうとしたので太郎は叫んだ。

「世間に物ぐさき人もあるものだ。あれで地頭の職がよくつとまるものだ。」

左衛門はこれをきくと怒つて、馬からおりると太郎のところに歩みよつた。

「お前は何者だ。」

「太郎です。」

「何を仕事にして居るのだ。」

「仕事はしません、人が喰べ物をくれるのを待つて居るのです。」

「何故仕事をせぬ。」

「面倒だからです。」

「土地を與へやう、田をつくれ。」

「面倒だからいりません。」

左衛門もあきれた、しかし、同情もして硯を取り寄せて札を書いた。物草太郎に毎日三合飯を二ど食はせ、酒を一どのますべし——といふのである。

それから太郎は、おぼ助りであつた。三年の月日が流れて信濃に杏の花咲く春が來た。

百姓達に、國守から京都に上つて、ながふをつとめよと命じた。百姓達は相談の上、物草太郎を都へのぼらせやうとて太郎のところに話を持ち込んだ。

そして、日々に都の美しさ、都の女のうるわしさ、都の人の情深さを讃へた。

太郎の心も動いて京へのぼることを承知したので百姓共も大悅びで旅裝をとゝのへてやつた。

太郎は山紫水明の京都に到着した。だが、都の人々は彼の顏が熊のやうに黑いのに呆れ驚いてたちまち評判となつた。

大納言は噂をきいて太郎を連れて來させた、下男につかつて見るとすこしものぐさげなるけしきもなく働くので七月ばかりも使用して十一月頃にいとまが出た。

『私、都へのぼつたなら美しい女房をつれて信濃に歸りたい念願でございます、一人下さいませんか。』

太郎は主人に賴んだ。しかし、この山男の女房になる京女があらうはづがなかつた。

十一月十八日のこと——太郎は清水寺に參詣した。京女がたく山に參詣して居た、そのなかで可愛らしい女を發見した、太郎は、女に近づこうとしたが女は怖れた。

それから歌の問答をした、娘の邸をつきとめて戀を訴へた。太郎の歌のすぐれて居ることを聞

こしめした帝は大極殿に召し歌一首つかまつれとの上意があつた。

折から梅花に鶯がとまつて啼いて居たので太郎は歌にした。

うぐひすの、ぬれたるこゑのきこゆるは、うめのはながさ、もるや春雨

帝はこれを叡覽ありて汝が鄕でも梅といふかとお尋ねがあつた、太郎は直ぐに

しなのには、ばいくわといふもうめのはな、みやこの事は、いかがあるらむ

と詠じた、帝の御感に入り先祖をお調べになると二位の中將の子とわかつた。

そこで信濃の中將に任ぜられ甲斐、信濃の兩國を給はつたので戀した京の美しい娘を連れて信濃に歸つた。

滿願寺の小僧火（穗高岳）

闇の夜に、銀糸のやうに重く白く松本市を縫ふて流れる烏川をへだてゝ西方を見ると、さながら巨人のやうに横はつた穗高岳の麓に、一つの星を投げつけたやうに小さな灯のゆらめくのがみ

られる。

不思議な事には、この灯は烏川を越ゆれば、全く光を消してその方角をさへも解らずになつてしまふ。

人々はこの怪火を『滿願寺の小僧火』と呼んでゐる。

栗尾山滿願寺の北に小さな祠がある、どうした緣起か、滿願寺には古くから、この祠に住職が丑滿時に御燈を献ずる掟があつた。

それは今から百年程前のことである。無信心の住職が、お小僧を使つて眞夜中の献燈を行はしめた。場所は深山の古刹であり、小徑には古杉老松が天に聳へ、萬籟死した丑滿頃鬼氣の身に迫るものがあつた。

かうした夜半の献燈が、どうして十二や十三の少年に出來得やう、小僧は献燈を云ひつけられる度に寺の門を出ては行つたが、生きた心地もなく中途から引返して來た。

そのことを知つた住職は小僧に折檻の限りをつくし、無慘にも殴り殺してその屍を密に祠の

建てゝある杉の根本に埋めた。

翌夜のこと、住職が燈を献じようと山門を出ると、不思議にも老杉の梢には小さな灯が閃いてゐた。

『呀ッ！』と、住職は叫んで立すくんだが、その儘行衛不明となつた。

灯は毎夜松本市を飛んでゆく、それは、お小僧の魂だと言はれて居る。

山上の池（燒岳）

日本アルプス活火山燒岳は絶え間なく噴煙をはいて居る。山上には、澤山の池がある、その池にまつはる悲哀の物語り——それは燒岳と切つても切れぬ因果が結ばれて居る。

太一の妻のお文は結婚後二年目にふたごを生んだ、子供は一ケ月と經たぬ間に死んでしまつたが、それから男の態度はがらりと變つて打つ踏むけるといふ處行は日を追うて募つた。

夫は遂に自分に情婦のあることを告げて彼女に離別を宣した。しひたげられ、涙の果は死のみ

が彼女の安息の淨土であつた。

噴煙むらがる燒岳の火口に彼女が廿三歳の若い日は葬られた、世の中の男といふ男に無限のぞうをとのろひとを、最後の地上でちかひながら……。

間もなく風向きをかへた山の噴煙は折柄の落陽に空中をきら〳〵と、まぶしい金りんの輝きを見せながら太一の家の前を過ぎた。

その後、太一の家では情婦と差向ひの濁酒によつて居た彼等が黑こげになつて燒死してゐるのを見たといふ。この話しは、三四百年も前の物語りであらう、當時の活火山は今は燃えやんで落くぼんで湖となつてゐる。海拔八千尺の頂上、紺碧の水は、噴煙と、魔の樣な山影を浮べて幾百年の祕密を冷たいみぎわの草にうそぶかせて居る。人々はそれを『お文の涙』と信じて居るのだ。

牝牛の死（青木湖）

木崎、中綱、青木の三湖は連鎖せる山中湖として何れも風光に富めるのみならず、また夫々に昔から傳說を以てあらはれて居る。殊に青木湖は周圍三里、糸魚川街道に沿ふて日本アルプス白馬岳の雄姿を遠望し、湖水は碧潭を湛えて物凄い程深いが昔から青木湖の主として、牛が棲んで居ると云はれて居る。

或る時、湖水の東岸に於ける加藏區の農家に一頭の仔牛が生れて、西岸青木區の農家へと貰はれ、其處で育てられた、此の兩區は何れも青木湖を挾んで東西に相對峙し僅に十數町を隔つるのみであるので、夕暮になると仔牛は屢々、湖邊に生茂る蘆間から、母の牝牛を戀しがつて、鳴き慕つて居た。ところが母牛の方も仔牛の愛に惹かされながら遙に對岸を眺めては一しほ之れを懷しんで鳴いてゐた。

或る晩、母牛は仔牛の鳴き聲に惹かされて牛舍を立ち出たものゝ、仔牛や何處と、湖邊の彼方此方を徘徊ふ裡に、憐れにも母牛は過つて遂に水中深く陷り湖底へ沈んで再び浮き上がらなかつた、さう云ふ母牛と仔牛とにまつはる悲慘なロマンスが湖畔の村人によつて傳へられてゐる。

播隆上人（槍ヶ岳）

北アルプス山系中でも最も困難と思はれる槍ヶ岳の開祖は、播隆上人であるといふ。

上人は越中の人であるが、その無限の願ひは、純白の雪に輝き渡る嶺々に走つた。ことに槍の雄大な姿が、上人を魅惑した。そして、一挺ののみを骨ばつた手にしつかりと握りしめて、山へといそいだ。

槍ヶ岳の麓小倉村に中田九左衛門といつて、公儀に鷹の巣鳥を獻上する役目をもつ役人があつた。そのころ槍ヶ岳一帯の常念山脈は九左衛門の支配下にあつたので、上人は九左衛門の弟の又十郎に案内をさせた。

山又山、始めのうちは薪取りや草かりなどのため細道も出來てゐたが、進めば進むほど困難が増した。が、あらゆる苦艱と闘つて、漸く現在の坊主岩にたどりついた。

『わしはこゝで暫らく修業するから』といつて、又十郎を下山させた。

かくて上人は毎朝星のきらゝかに殘るころ、槍の絶頂にはひ上り專念にのみを振ひはじめた。

今こそ槍ヶ岳の絶頂は無理をしたら十五六人は立てるが、そのころは、文字通りに槍のきつ先のやうに尖つてゐた。そのきつ先に縋りついてのみを揮ふたのである。海拔一萬尺、ほのかに足もとから白んで行く曉光を背景に、そしてやがて赤々と大きな太陽が渦を卷きつゝ暮れ落ちてゆくまで、休みなく大岩のひとひらづつをコツコツと刻んでいつたのである。

四十八日の苦行は、頂上に四坪ばかりの廣場をつくり得た。僧はその上に坐禪して修業した。大自然の突端に默々として坐禪する僧の聖なる姿、それは、あまりにも尊いものであつたに相違ない。

上人は山を下つて淨財を集め、銅像阿彌陀佛、觀世音菩薩、木像文殊師利菩薩の三體を作つた。そしてこれらの尊像を頂上に安置した。また槍の穂先から百間ばかり鐵の鎖を懸け、さらに銅體坐像の釋迦牟尼佛を安置した。

そののち上人は、天保十一年美濃國太田町の豪農林市左衛門方で五十五歳で大往生を遂げた。

その碑はアルプスの靈姿を仰ぐ松本市外玄向寺山門内に今も殘つてゐる。

ついでに、上人が殘した鐵の鎖は明治十五年ごろ某といふ獵師が盜み取つて古金として賣り飛ばしてしまつた。が、天罰は恐ろしいもので、彼は賣却後二ケ月ののちに、狐にばかされて變死した。今の針金はその後設けたものである。

二子岩の假小屋（槍ヶ岳）

北アルプス槍ヶ岳の槍ヶ岳溫泉は海拔七千尺ばかりの兩股の水源にある無人の境で岩からこんこんと熱湯が湧出し岩壁より一大湯瀑となつて居る。

この溫泉に悲劇が生れた。

それは明治九年舊九月のことである。山麓の村民二十一名は相談して、この靈湯を下方に導き浴槽を設け浴舍をつくり湯治場としやうといふので打つれて登山した。

そして、源泉に近い二子岩に假小屋をつくつて露宿所とした、木を伐り、岩を碎いて仕事を始

めた。

流れ星のいくつも空に消ゆる二十三日の夜である。突如、山は物凄く鳴動した、と、天地もくづれんばかりの大曝音と共に、小屋の上方にかゝつて居る大雪谿が大雪崩となつて落下した。

魔の雪崩は小屋を流し二十一名の人々を雪の下敷とした。

これを知るものはたゞ殘月と山靈とのみであつた。

そして死體は翌年の夏まで雪の下敷となつて居た。それから、この山の溫泉にさわると祟りがあるといふので今も無人の境となつて居る。

巨人の足跡（唐松岳）

北アルプスには奥不歸岳と唐松岳との間に有名な難所がある。そこは岩が崩れ易いのだから非常に危險である。

この唐松岳の名の起りには、面白い話が祕められてゐる。

昔――巨大な體軀をした巨人が、北の方からのそりのそりと信濃國にやつて來た。そして、西條の湖のほとりまで來た。

巨人はふと、足元に枝振りのいゝ小松を見出して立止まつた。

「これはいゝ松だ。しかし、こんな水邊に置くのは勿體ない話だ。もつと高い處に置いてやりたいが、どこがいゝかな。」

巨人は四邊を見廻した。四邊には立山、乘鞍岳、御岳、大洞山などの高山峻嶺がさながら箱庭の山のやうに幾つも幾つも並んでゐた。彼はその中で一番高さうな御岳の頂にこれを飾りつけてやらうと考へた。そして、

「なにしろ、里の小人どもは吃驚する事だらう。」

と、面白さうに笑つた。

黎明の光りは、かすかに湖面に白く息づいて、彼方此方の森蔭から勇ましい鷄の聲が頻にあがつてゐた。

巨人は巨大な掌へその小松を乘せて、里の小人の寢息をうかがつてゐたが、おもむろに手を差しのべて小松を山の上に移し植ゑようとした時、不意に太平洋から、眞赤な朝の陽が上つて來た。巨人は畫が大嫌ひであつた。

「呀ッ！」と、彼は驚いて手に持つた松をそのまゝそこへ投げ出して走り去つた。

朝は來た。まぶしい光に夢を破られた地上の白鳩達は、塒をはなれて飛び交うた。平和な朝を水甕を頭上に乘せて泉へと立ち出でた里の女房達が何氣なく向ふを見ると、雲を突くばかりの大男が後をも見ずに、どんどんと逃げて行く姿を見た。女房達は驚いた、そして又その上、湖畔の松が根こそぎにされてゐるのを知つて一層驚いた。

巨人が投げた松は今の唐松岳の頂上に根をはつた。里人は、それからこの山をかく呼ぶやうになつたのである。

それから幾千年經つたことであらう。湖の跡は今はないけれど、松は今も茂つてゐる。そして信濃の國に沼や湖の多いのは、この巨人の足跡だと傳へられてゐる。

天安鞍（乘鞍岳）

太古――乘鞍岳には天安鞍といふのがあつた、その鞍を馬につけて乘れば、どんな馬からでも落つることがないといふ。

山頂には大國主命を祀つた權現社がある。鞍部にお花畑があり、山中に岩桔梗が多い、夏冬に變色するといふ小動物オコジョが捷息して居る。

日本アルプス中でも、乘鞍岳は立山に次いで古くから靈場として開けた山であつたが、噴火したゝめ登山者が中絶し『山上瘴氣を發し頂きを極むるものなし』とさへ傳へられるに至つた。

それが開かれたのは明治初年のこと、諸法佛則といふ禪僧が登山して、石室を作り雲を斬つて雨を降らす仙術を修して、山上の瘴氣を拂つて登山を容易ならしめたと傳へられて居る。

けれど、乘鞍岳の最初の横斷者は講談で名高い塚原卜傳である。

諸國修業中の卜傳は信濃路から飛驒入りを思ひたつて、單身で乘鞍を越えたが山中雷雨に惱まされて、一夜をこの山中の巨岩の下で明かしたといふ。

現在、摺鉢山の中腹にある『卜傳雨宿りの岩』がそれである。

入山邊の湯（王ケ鼻山）

北アルプス信濃の連山、王ケ鼻と鉢伏との山合ひに、さゝやかな存在を知られてゐる入山邊の湯。――その溫泉にまつはる奇しくも哀しい物語。

何時のことかは知らぬ。この溫泉場へ來て湯治してゐる年老いた武士と、その娘の眉目美しい乙女があつた。

娘は何時しか土地の炭燒きの若い男と戀を語り合ふ間柄となつた。

戀の噂は風の如く忽ちこの狹い溫泉場に擴がつた。何しろ武士の娘と炭燒き男である。醇朴な村人はむしろ驚愕してこの噂を傳へるのだつた。

さうした噂が、やがては父親の武士の耳にも這入つた。娘はひどい折檻を受けねばならなかつ

た。

或る夜、娘は父の寢息を窺ひながらそつと部屋を脱け出した。星の光り疎らな夜であつた。

村端れの谷川のほとりに、彼女の戀人は待つてゐた。寄り添ひ、寄り縋りつゝ、涙まじりに泌泌と語り合ふ二人の姿。――と、先刻から娘の跡をつけて來た黒い影が、つと狙ひ寄りさま拔打ちに一刀を浴びせかけた。娘は聲も立て得ずバツタリと地上へ倒れた。老いた武士は、嚴しい武家の慣はしから、たつた一人の愛しい娘をわが手に掛けたのである。

武士の刄を免かれた若者は、其場から姿を隱して了つたが、次の日、炭燒き竈の中へ身を投げて彼女の跡を追つた。

其後、數日を過ぎて、この湯宿の煙突から死體を燒くやうな不氣味な臭氣が流れ漂ひ、同時に湯槽の湯が血汐の色に染つた奇怪事が起つた。誰も、その原因は知らぬ。しかし、人々は一樣にかの薄幸なりし二人の戀と結びつけて、今更に痛ましい語り草とするのであつた。

燕の巢（燕岳）

登山に便利なところから、人氣のある北アルプスの燕岳の深谷に、團惠谷といふのがある。

昔、この山峽に老いたる父と、美しい娘が平和に幸福に暮してゐた。

娘は美しく成長した、彼女は、人里が戀しくなつた。

「一度、山を下つて里に出たうございます」と、父にせがんだ。

「里は汚れてゐる、怖ろしい人間どもがゐる。山の中が一番樂しいところだ」と父はさとした。

が、娘は里がなつかしかつた、人が戀しかつた。

月の美しい夜、娘は、父をすてゝ里に下つていつた。それつきり再び山に歸らない。たゞ、その翌年の春、さびしく住む老人の家の軒に一羽の燕が巢をつくつた。その足には娘が締めてゐた黒い帶と同じ色の糸をしつかり結んでゐた。

「娘が歸つた」

老人は喜んだ。

そして翌年の春――老人はさびしく死んで行つた。その冷たい死體の上を悲しく鳴いて燕がいつまでもいつまでも飛んでゐたが山に雪降る頃、燕も老人の死體のほとりに飛び勞れて死んでしまつた。

長兵衛ケ池（常念岳）

北アルプスの常念登山口、烏川を少し山へ登つたところに、下堀といふ小さな部落がある。そこに、むかし田田長兵衛といふ、强慾非道、鬼のやうな高利貸が居つた。それは、ある年の暮も押し詰つた三十日のこと――田舍のお正月は多く蓄でやる。――幾十通かの證文をいれた風呂敷包と、紺の財布を首に長兵衛は、すぐ隣村の成相新田（今の豐科町）へ貸金の取立に出かけて行つた。

あちらこちらと苛酷な業ざらしをしてゐるうち、長兵衛の大嫌な夜が忍び足して近寄つて來た

が、まだ取り殘した十數軒の證文のために、恐いより欲が强くて、殘りの家々を回り盡した時は既に、夜も更けてゐた。長兵衛は一番最後の取立てをした家から提燈を借りて、おつかなびつくり家路についた。

『こんな暗い晩は、日頃おれに恨みのある奴が竹やりで後から突きはしないかな、それとも刀で……、今先きに寄つた家には鐵砲があつたが』など、、流石に日頃の積惡が思ひだされたのであらう。びく〳〵しながら、成相新田のはずれのまはり二丁もある、名無池の邊にかかつた時、とてつもない大きな大砲でも打つ放したやうな音が聞へた。

びく〳〵者の長兵衛、この音を聞くと同時に『ヤラレタ』とばかりそこに悶ぜつした。

この大きな音は、この池の面にはりつめた氷が、春近くなつて龜裂を生じてゐたのが、ドカツと水に落ちた音であつた。それ以來この名無池は土地の人々から『長兵衛ケ池』と呼ばれる樣になつた。今はもう本當に埋め立てられて、名ばかりの池が殘つてゐるが、强慾者のうはさと共にそれからそれへと語り傳へられてゐる。

雷　鳥（御　嶽）

昔寛行者は、武藏國秩父大瀧村の人で、本名を滝見好八といふ。

行者は各地の山嶽を突破したが、最も困難したのは、日本アルプスの靈山とされてゐる御嶽を開いた時であつた。

寛政四年の夏、行者は五人の人々を從へて、木曾路から御嶽へ向つた。山は嶮しく、道もなかつた、一行は深山に分け入り、行くことも歸ることも出來なくなつた。

その時、どこからともなく、不思議な一番ひの鳥が現はれて、一行を導いた。

「あの鳥こそ文殊菩薩の化身に相違ない」と信じて、人々は鳥のあとを追ふた、そしてつひに頂上を極めた、

行者は鳥を獲て山を下つた。鳥は冬になると白くなり、春になると羽色が變るので珍らしがられたが、遂に死んだ、行者はこれを憐れんで、その翼を身から離さなかつた。

この靈鳥こそ、日本アルプスの愛嬌者の雷鳥なのである。

阿古太丸の塚（御　嶽）

延長年間、京都の北白川宿衛の少將重頼は子がないので、御嶽神社に祈願すると玉のやうな男女二人が生れた。男を阿古太丸、女を利生御前と名づけ喜んだところ、まゝならぬは世の習ひ、その後夫人は可愛い子を後に、歸らぬ旅路におもむいた。乳のみ子を殘された重頼は後添へをめとつたが、生さぬ仲の悲しさ、家庭には不和がつゞいた。

利巧な阿古太丸は十歳の時家出を決心し、父母の祈願をこめた御嶽神社に參詣すべく本曾の山路をたどり、目的だけは達したが、年齒もゆかぬ少年の長旅、遂に歸路木曾の板敷野で死亡した。

少將重頼は風の便りにこれを聞き、愛兒の遺跡をとむらふべく利生御前と共に旅立つたところ、御嶽七合目で頼みとする利生御前まで腹痛を起して病死した。

悲歎やる方なき重頼はその後雷鳥の導きで漸く頂上奥社に參拜する事が出來た。——どく最

近まで婦人が七合目までしか登らなかつたのはかうした故事からであるといふ。いま御岳の中腹にある名勝『扇ケ森』は重頼が登山した時扇を落した所であり、又麓の白川櫨現は重頼および利生御前をまつつたもので、福島と上松の境の板敷野には阿古太丸の塚もある。

興禪寺の檀家（御嶽）

御嶽のふもと木曾福島町の、興禪寺は永享十一年の開基で德永五年木曾信道が再興以來五百廿五年を經た由緒ある寺であるが明治卅九年の冬に本堂から發火して鐘樓や庫裏まで大半灰じんに歸し國寶の勅使門のみが災厄を免れた。

古狐――僧蛻庵にまつはる『狐だん家』のローマンスが、この名刹にまつわつて傳へられてゐる。

戰國時代、飛驒の高山の西北方の松倉城によつた參議秀綱は秀吉の臣金森長近に滅ぼされた。秀綱にちよう愛されてゐた一疋の古狐は城主を失つて流浪の揚句やうやく諏訪の千野家にたどりつき、花坊主に化けこんで蛻庵と名乘つた。

蛻庵は、非常に俊敏な性質で才物であつたところから、千野家では重寶ものとして、殊のほか可愛がつてゐた。

ところが、ある日のこと、蛻庵が晝寢して油斷してゐたゝめに狐の尻尾をちらりと、同僚に見つかつて、とりかへしのつかぬ大失敗をした。

千野家では、それでも蛻庵を手放さうとはいはなかつた。

しかし、蛻庵の方で居ずらかつた。無理に、そこから暇をもらつて、木曾の興禪寺に行つてときの住職桂岳師に氣に入られ、僧侶となり納所を引受けてこゝでも重く用ゐられた。

桂岳住職は、ふとした事から飛驒下呂の安國寺に書面持參の使者を立てねばならぬ用事が出來た。

蛻庵はその飛脚を命ぜられて、旅僧姿で飛驒街道を下路へと急いだ。

途中、日和田村――現在の益田郡高根山――まで來たときには、いつの間にか夕日はとつぷり

と暮てしまつた。

日和田村は、御嶽山中の高原にある村で、穀物の收獲がなく僅かに豆やひえを常食としてゐて、村人の多くは、獵師をかねて生活してゐる、蛻庵一夜の宿を乞ふたのも、宗兵衛といふ獵師の家であつた。

夜がふけてのことである、獵銃の手入をすました宗兵衛は何氣なく銃をとりあげてねらひをつけた、と、不思議や、先方に古狐が僧衣をつけて坐つてゐるのが見えた。

銃をおろすとろばたには、こよひ宿を乞ふた旅僧がゐる。

昔からいひ傳へに、國友の名銃は、よく怪物の正體を見破るといふが、

『彼奴は確に坊主ではない、狐だ――。』と心につぶやいた宗兵衛は、素知らぬ顏でたまを込めたまま寢についた。

丁度、蛻庵が正體もなく寢入つてゐる頃を見濟まして一發！ ヅドンと放つた。

そこには、白狐が、血まみれとなり、胸に興禪寺から安國寺へ贈る書面をかけてゐた。

それから暫らく經てのことである。

日和田の村には恐ろしい疫病が流行して、宗兵衛一家が全滅するのを手初めに、全村疫病に倒れるものが續出した。

『これはきつと狐のたゝりに相違ない……』

なんとかして、狐のめい福を祈つて、疫除をしようと全村の評議が一決した。

村の使は興禪寺の住職桂岳師のもとに走つた。

『何も運命ぢや、心配することはない――蛻庵も天命ぢや――』

快く全村が興禪寺の檀家となつて蛻庵のめい福を祈りたいとの願ひを受入れてくれた。

信飛國境にまたがる日本アルプス御嶽を境にして九里をへだてた飛驒の益田郡高根村には信濃興禪寺の檀家が今もなほ百戸を數へ毎年春と秋とには土地で收獲されたそば粉と、わらび粉を供物としてみつぎ、いまだに、一回も缺かしたことがない。

兄妹地蔵尊（御嶽）

夏でも寒い木曾の御嶽山の東面した山麓に今も交通がもたらす多くの文化にめぐまれぬ岡田村がある。

御嶽は信仰の山だが、その山麓に不思議な兄妹地蔵尊といふのがある。

戰亂の頃。御嶽へのぼる若い男と娘があつた、彼らはほんの道づれに過ぎなかつた。

地蔵峠の難所にさしかゝつた時娘は病氣になつた、青年は親切に介抱した、そして、娘が全快する頃二人は戀を語る樣になつた。

互に身の上を語らねばならなくなつた時に、初めて、幼い時に別れた兄妹と知れた、彼らは嬉しかつた。が、悲しかつた、遂に死に誘つた。峠の谷底へ血の死體となつた。

人々は哀れな彼らのため地蔵尊を祀つた、今も殘つてゐて、緣結びの神だとて若い男女から信仰されてゐる。

緣結びの木（御嶽）

木曾の御嶽山麓にある開田村、此の村は御嶽山に抱かれた樣な位置にある村だけあつて土地の人達の間には敬神の思想から生れた幾つかの人間味ゆたかな習慣がある、殊に性に關した、よそに見られないものがある。

福島町から新開村を通つて、飛騨街道を開田村へたどると途中に地蔵峠がある、此處の峠に夫婦木、又は緣結びの神と云はれて願ひを持つ男女に拜まれ祈られる不思議な古木がある。

其のいはれはかうだ、明治になつたばかりの頃、村に太蔵と云ふ若者が居た。川ひと筋離れた向ふ側の家のおたきと太蔵の間に人知れず戀の花が咲いた。然し間もなく生れた噂は噂を追掛けて、やかましい世間の口は二人の戀を素直には遂げさせなかつた。二人は噂の中に身を沈めて結婚の日の近づくのを祈つた。けれど家柄も違へば財産も違ふ二人の仲は、危うく周圍の人達に踏にじられやうとした、太蔵は何物にか頼らずにはゐられなかつた、おたきとてまた同じ思ひだつ

た。

高い山の頂から秋が迫つて來る朝、太藏は村から馬をひいて峠にさしかゝつた、峠の上は今や紅葉し始める時であつた、葉の少くなつた木立の中からふと此の夫婦木が太藏の眼にとまつた幹と幹とが堅く結ばれてゐる有樣は彼に或ものを暗示した太藏は自分の肌着の片袖をちぎつて此の夫婦木に卷き付けて戀の成就を祈り念じた。

太藏とおたきとの結婚式があげられてから、間もなく此の夫婦木は緣結びの神樣だとの評判が村人の間に流れた、そして二人の結婚にあやからうとする者は何時か祕そかに肌につけてゐる物の片身を捧げて祈願をこめる樣になつた。

此のかへでの緣結びの木は今も葉を暗い程に繁らせてゐる。周圍の雜木が伐られても、これば かりは伐られない。そして今もなほ若い男女の祈りの的となつて居る。

お六櫛（御嶽）

木曾の名物お六のくしは解けし前髪とめにさす

木曾名物の一つ藪原宿で出來るお六ぐしは、最近ゴム製品のため壓倒され、賣れゆきが全く絶望となり藪原區民の失業問題を生じ當業者も何とかして回復しやうと、對策を講じてゐるが最近では問屋や小賣店からもお六ぐしは買手がないとの聲をもらされるので、ほと〳〵困りぬき職工の中には道路人夫や農家の手傳に早變りをしたものもあり、こゝ暫らくの間に名物お六ぐしも姿を消してゆくだらうと悲觀されてゐる。

むかし木曾吾妻村妻籠の宿にお六といふ女があり、持病の頭痛に苦しみ、御嶽山に願かけして神のお告げにより發明したのがこのくしであつた、妻籠はその當時木曾街道と大平街道の分岐點にあたりかなり重要な宿場だつたので、旅人の間に忽ち評判となり、遂に土地の名產となつたもので、材料にミネバリといふ堅材を用ひたため、くしの齒が細かいのと丈夫なのとが成功の原因であつた。

ところが、このミネバリといふ木は鳥居峠附近や伊那地方には澤山生えてゐたが妻籠附近には

あまりなかつた、この隙に乘じ鳥居峠下の宿でどん〳〵製造して賣り出し、遂にお六ぐしの本場が藪原のやうになつたのだといふ。宿を通りぬけると道の兩側の家からビューツキューツと鋭いすんだ物音が聞える、それが手明りの中で削るお六ぐしの製造の音なのだ。

かうして藪原宿の人達の生活はくしの製造を中心として擴がり、年額三十萬枚も出たのが、今では材料さへも伊那その他の方面から取り寄せねばならぬやうになり、その上販路がだん〳〵縮むので、五百戸の部落民は全く青息吐息である——改良も宣傳もなく親ゆずりのまゝ賴つて來た職業は物質文明によつて極端な悲哀を生み經濟闘爭のくわ中にまき込まれ一日一日と亡びてゆく。

寢覺の床（御嶽）

御嶽と西駒ケ岳の登山路にあたる寢覺の床には、浦島太郎の傳說がある。

相摸の海に浦島は魚つりの船を出した、一匹の龜がつれたが海に放した、龜は浮きつ沈みつ禮

をのべるやうにして海中に姿を消してゆつた。

夕映の輝きがきら〳〵と長い線を水の面に浮べ、あたりが夕暗につゝまれてゆく頃浦島の船は歸路についた、魚の獲物は雜魚一疋なかつたが、龜を放してやつたことに浦島は奇驚を施したやうなあはい滿足を感じた、濱傳ひに家路をたどる歩みは、春のやわらかい風に浮ぶやうに輕かつた。

フト浦島の行く手に降つたやうに立ち現はれた、浮世の月も花も物かは、十八、九ばかりの容姿端麗な乙女があつた。かの女は浦島をみてニツコリと微笑んだ。その乙女の水際たつた美くしさと、心あるかのやうな微笑にみせられた浦島は、戀の夢遊病者のやうに乙女の後をおつて行つた。

浦島はおとめに引かれるやうにして、どこをどう歩いたか、程なくまばゆい金殿玉樓の御殿の前に來た『どえらく立派な御殿だ！』

思はず叫んで乙女に問ふと、

「これは常春の國龍宮城で私のお家でございます――」と答へた。

「さうすればあなたが乙姫様で！」

乙女は浦島の驚きをさもおかしげにニコ〳〵とうなづいた。

あこがれの龍宮、乙姫様――夢なら覺めよ、浦島は目がくらんで倒れさうになつた。

乙姫の案内で浦島は、數多の少女達に出迎へられ奥殿へと導かれ、山海の珍味やお酒の饗應をうけ、踊りの、舞ひのともてなされた。

浦島は、歡待にあくことを知らず、樂しい月日を送つた。

そして乙姫といつしか甘い浮世の戀をさゝやくわりない仲となつてしまつた。戀の二人は父王の許しを得てつひに偕老同穴を契つた。二人のむつましさは御化粧したおしどりのやうにはなやかに樂しかつた。

龍宮の殿に納まりこんで、乙姫との愛の幸福に陶酔して數もわかたぬ、年月を過ごしてゐた浦島は或時遠いかなたからかすかに聞えてくる鷄のなき聲を耳にして俄に下界の吾に歸り、故郷

の父母や、友達のことを思ひ出した。

「おれは故郷のことをすつかり忘れてゐた。」

浦島はかういつて、夕べの寢物語りに乙姫に一先歸つてきたいからとうつたへたが、乙姫はわかれををしんで泣きくづれてきかなかつた。浦島も乙姫のいぢらしいなげきの姿に引かされて、思ひとゞまつてゐたが、再び鷄の聲を聞いて、愈々故郷戀しくてたまらず、こんどは父王にねがつて歸國の許しを得た。

「夫婦揃つてなれば里へ參るがよからう――」

父王の情にくだけた言葉に浦島は乙姫と擁しあつてよろこんだ。それに神變不思議の妙法を以て二個の新道を開いてこの道をゆくがよかろうとの親心に、浦島夫婦は打よろこび、新道をたどつて古郷へといそいだ。夫婦はやがて深山幽谷の川邊にゆき着いた。浦島はたどり着いた川邊が自分の生れた里とも似つかない別なところであつたので少からず驚いた。然し乙姫は、谷川の流れ、咲きみだれる草花、鳥のほがらかなさへづり、やはらかにしつとり吹く風、など下界の野趣

頗る意に召し毎日川の流れを渡つたり、岩を飛び、花をつんでは嘻々として夢のやうな月日を過ごしてゐた。

浦島は乙姫の悦びのさまをみて、安堵の胸をなぜ、伴ふて山に上り、川に糸をたれては、ひたすら乙姫の氣嫌をとつてゐた。

闘守のない月日は、花の春、清涼の夏、紅葉の秋、雪の冬と四季をめぐつて過ぎていつた、乙姫が土地になれてくるにしたがつて、浦島の乙姫に對する言葉は次第に荒々しさを增し、態度もつれなく、爭ふことさへ度重なつてきた。

浦島の態度がつれなくなればなる程、乙姫は悲しい物淋しさの涙に暮れて、つひにはそのたびに龍宮の父母の許へ歸つてゆくのであつた。これには男自慢の浦島もほと〳〵弱りはて、しかたなく、遂る〳〵龍宮まで迎へにいつては連れて歸つた。嘔嘩はしても、乙姫なしには浦島は一日も暮せなかつた。そこで考へた末、乙姫が龍宮へ歸つてゆくのは畢竟近道があるからだ……。さう考へついた浦島は姫の留守中に大石を以つてうらめしい近道をふさいでしまつた。

浦島の亂暴なしうちにすつかり立腹した乙姫は浦島の謝罪嘆願もきゝいれずキツイ決心の色を見せて龍宮へ歸るといつてきかなかつた。

『私はもうおいとまします、お別れに當り私の通路の穴はあなたが塞いで差上げます。』

あなたの穴は私が塞いで差上げます。』

といつて、やをら口中に呪文を唱へた、そうすると不思議なことに浦島が龍宮から歸つて來た穴から、水晶のやうな玉水が滾々とわいて出た。

これを見た浦島は『アツト』叫んだまゝ奇異の感に打たれ、喪心者のやうに呆然として眺めてゐた。するとこんどは乙姫の姿が一條の紫煙となつて、浦島がふさいだ穴の裂け目から吸ひ込まれるやうに消えてしまつた。浦島は狂倒せんばかりに驚いて乙姫の名を聲をかぎり呼んだが、もう美しい乙姫の姿はかへつて來なかつた。

水の流れが徒らに男泣きに叫ぶ浦島の妻戀の聲をかき消すやうにとう〳〵と流れてゐた。

『乙姫はおれを捨てゝゆつてしまつた……』

こういつて浦島は悲しみに身も世もなく、孤獨の現實の淋しさに鬱々として日を送つてゐねばならなかつた。

浦島は『戀しい！』乙姫の幻影とありし日の樂しかつた日夜の思ひ出に惱まされ乙姫が肌身につけた布のきれ端でもないだらうかと變態病者のやうに思ひ出を尋つて索して歩いた。ある日、乙姫が秘藏の玉手箱として大事にしてゐた手箱が岩かげに、置き忘れられてあるのを見出した浦島は恰も若人が戀人から送られた一片の栞を手にして狂喜するやうによろこんだその手箱に慰められて又幾日かを過してゐたが然し浦島はまだ物寂びしい味氣なさをどうすることも出來なかつた。

乙姫を戀ひしたふ、情焰は浦島をして無意識のうちに遂に玉手箱の蓋を開けしめてしまつた。

玉手箱からは紫の煙りが立ち上つて手箱の中を見入つてゐる浦島の顏を包むやうに蔽つた刹那それまで紅顏の美青年だつた浦島太郎は忽ち六百餘歳の老人と變りはてゝしまつた。

走馬燈のやうな華かな過去の夢から醒めた、浦島はそこにさゝやかな庵を結んで若き日の思出に耽りながら孤獨の寂びしさを釣に慰めて餘生を送つてゐた。浦島太郎の目醒めの處、即ち今の寢覺めの床にはかうした傳說が語り傳へられてゐる。

佛法僧鳥（御嶽）

山戀のころ、紺碧の空に雪線を引いて、くつきりと浮ぶ夏の山をめざして、誇らかな青春を運ぶ人人は慌しくもお花畑をとびたつ、奇鳥の行方に輕い興味をかんじ、さては憩ひの溪流のほとりに、耳なれぬ異鳥の囀りに疲れを忘れることもあらう。夏山の鳥は登山者のよき道伴れでもあり、慰めである。

佛法僧鳥は一名三寶鳥ともよばれ『ぶつぽうそう』または『ほうぼうぼう』と三聲鳴くのでこの名がある。深山幽谷に住んで、滅多に姿を見せず、夜も月夜を憚るといふどこまでも闇の鳥である。羽色は綠を帶びた墨色、頭と顏とは眞黑だ。夏の間まだ聲が馴れないうちは『ぶつ、ぼう』

と二聲くらゐしかなかぬが、秋近く聲が熟して來ると、見事に三聲鳴くのである。關西では高野山奥の院の裏山や大門のあたり、木曾福島では小學校の近くと崇禪寺のあたりが聞き場所として有名で關東では日光山が佛法僧鳥の名所である。

木曾の興禪寺山と言へば、數百年の老檜が鬱蒼と茂つた大森林で、實なほ暗い檜の木立の間から或時は人の聲かとも聞かれ、或る時は又鐘を叩く音かとも疑はれる奇異な響が夜な〳〵人々の耳朶に響く。木曾中學校の博物學擔任教諭澤原一二氏が當時の校長寺田永松氏と協力苦心の末漸くのことでその聲の主を發見した。それは深山の密林に巣喰ふ佛法僧鳥といふ不思議な名前の鳥の鳴き聲であつたのである。それからこの鳥の名が次第に宣傳されて評判となり遂にその評判は木曾の谿から出て名高くなり、物珍らしさに諸方から人々が木曾の谷へとやつて來た頃にはこの不思議な鳥は、その美しい姿をどこへか消して了つた後だつた。彼等は燕の樣に夏鳥に屬し、毎年四月下旬南洋諸島から渡來して蕃殖し、九月の上旬になるとその雛をつれて再び暖い國へと去つて了ふのである、かうした噂が擴がつてからは木曾ではこの珍鳥の再來を一日千秋の思ひ

で期待して居た。春風秋雨、一年間に亘つて待焦れて居た、佛法僧鳥は春四月下旬になると興禪寺山の御料林へ來て、物凄い大密林に巣喰ひ、毎夜九時頃から夜明けまで『ブツ、ボウ……ブツ、ボウ……ブツ、ボウ……』と幽寂な鳴聲で短か夜を鳴き明すのだ。この鳥は古來我國では、鶯鳥として詩歌などに詠まれ、高野山、日光、秩父等の深山幽谷の森林に棲息し、其の鳴聲が佛法僧の三寶を唱へるに似るところから棲み家を靈場と結びつけられて、三寶鳥とも呼ばれる有名な鳥である。其の形態は小鳩に似て、嘴は赤味を帶びて幅廣く、嘴端は黑く釣曲し、全身の羽毛は青味がかつた、美しい黑瑠璃色で、初列の風切羽の裏には、圓い白色斑がある。習性は勇敢且鈍重で、前にも書いた通り春來て秋去る渡り鳥である。

この鳥が自然の狀態で活動してゐる美觀を記して見たい。その黑味勝ちの孔雀羽色である、彼が檜や樅のやうな黑味が〻つた森林の下枝に靜止する時は、その叫び聲のみ聞えて、姿は容易に見つからぬ友人を誘ふてそれと指しても、なか〳〵見つからぬから面白い。これを保護色と言ふのであらう。

六月になつて、その發情期に入り盛に鳴囀するやうになつて來ると、急にその嘴の光澤が增して眞紅に燃える。發情期に入つたどの鳥にも見る外形上の變化が、佛法僧鳥にあつては特に其嘴の色彩上に現はれるのだと思ふ。ことにその雄の嘴の鮮明な紅色は剝製された標本などでは想像もつかぬのである。殊に、初夏の明方のまだ薄暗い樹立を縱橫に縫うて、その朝食をあさる場合に於て、保護色の關係でその形のはつきりしないのに、その大きな眞紅の嘴のみが流星のやうに著るしく目を曳く。なほその翼の下方に見る白色の認識表は斯くの如く四圍の薄暗い場合に特に吾人の注意をひくのである。

殊に、雄がその隱れ場所ときめてゐる樅の茂みに於て飽食後の一休みを貪る姿——。初夏の太陽が勢ひよく昇る、水蒸氣で飽和された森林の裏に射し込む光線が銀糸の樣に光る、佛法僧鳥の眞紅の嘴と、つやつぽい孔雀色の羽が樅の細葉を透して見える。それさへ已に繪であるのに、更に双眼鏡を向けると、光の分散現象を起し嘴を中心に七色の彩圈が浮んでくる、その羽毛からも、樅の小枝からも、大小幾多の色圈が湧き出る。勿論この現象は佛法僧鳥あるが爲めに起るの

でなく、水蒸氣、太陽の方向、レンズの關係等によつて見ゆるのであるが、この樣なのを佛教信者などに見せたなら、きつと靈鳥にしてしまふだらう。この靈鳥佛法僧はこんなに御光を射出しながら、よい氣持ちになつて、居眠りを續けて居る。

今日までの調査で、木曾川本流に沿うて城山興禪寺の森、この地にこのやうな鳥が渡來しはじめたのは、大正六年頃からのことらしい。支流大瀧川に沿うて、字三尾の八幡社と黑澤の御嶽本宮の森支流菅川に沿うて字原の森に棲巢することは確である。なほ注意して流域を調べたら外にも見つかるかと思ふ。

なほ、有名な雷鳥の外に山に居る鳥は次の樣なものである。

あかせうびん　かはせみに似た小鳥で山間部の溪流近くすみ別の名をみやませうびんといふ色は下背と腰が白色で、そのほかは栗色「きようろろ、きようろろ」と可愛い〻聲でたく。

駒鳥　羽色美しく背は暗赤褐色、頭と尾は赤色、額と咽喉、上胸は橙色を帶び羽はオリーヴ色、日本では日光や吉野山に見うけられ鳴き聲が駒の嘶くのに似てゐる。

岩雲雀　富士山や日本アルプスなど高山の原本帶の岩石をとび廻つてゐる灰鼠色の小鳥、富士山ではお山雀と呼ばれてゐる。

2　中央アルプス篇

天津速駒（駒ヶ岳）

太古――那須國造は、八溝山の八峽大蛇を退治しなければならなかつた。

それには信濃國の駒ヶ岳の天津速駒に打乘り、乘鞍岳から天安鞍を、槍ヶ岳から天日予、立山から天廣桙を借り受けなければ目的を達することが出來なかつた。

國造は遠く信濃國に旅して、山から山へと天津速駒を探して歩いた。この駒は武甕槌神の神去りました時、その御魂から生れ出たといふ勇敢な神馬で、双の肩には銀色の翼を生じ常に空中をかけ廻り、夜になると、この山嶽中の高山である駒ヶ岳の絶頂で寢るといふ不老不死の神馬で一度でもこの速駒に逢つた人は、どんなに虚弱でも、きつと全身に清い活氣が漲つて來るといひ傳

へ、人々の崇敬の的であつた。

國造はある日、天津速駒が駒ケ岳の姫ケ泉の邊に遊びに出るといふ事を聞いたので山に登り毎日この泉の邊を徘徊して探し求め、馬の姿を見ることが出來た。

しかし、たゞ近づいたのではとても捕へ得られまいと思つたので、不意を襲つて目的通りに速駒の魔の手綱を引き、それから桑鞍岳から鞍、槍ケ岳から天日予、立山から天廣楯を借りた。

八溝山に時ならぬ大旋風を起し、毒の狹物の中で八峽大蛇を退治した。さうした戰鬪に大功のあつた天津速駒はその後駒ケ岳に歸つた。

寛文中、尾州の有司が登山の時、ふと、この速駒に行き逢つた事があつた。その時は、首の毛も尾の毛もたれ引き、眼は日月の如く恐ろしい形であつたが、人影を見ると、峰の中段までは靜かに登つたが、俄に雲たちおほうて行方も知れずになつた。

毎年十二月二の中の日には、神馬が風にかけて阿彌陀如來を乘せて善光寺の駒返橋まで來ると傳へられてゐる。

織田信長が甲斐の武田勝頼を攻めるために兵をこの山麓に進めた時である。

信長は神馬の傳說をきいて興味をおぼへたので秀麗な山を仰ぎながら云つた。

「神馬だとて捕へられぬことはあるまい。今年は戰ひのために出來ないが來年は山狩りをしてその馬を生捕らうではないか。」

「それはまことに面白い催でございます。」

諸將も豪快な信長の言葉に手を打つて贊成をした。

かがり火は赤く燃ゆる、空には星が美しくきらめいて居る。戰ひを前の祝盃に醉ふた戰士たちは胸を躍らせて山を仰いだ、山は永遠の神祕を誇つて空に聳えて居る。

が——その年の六月、信長は本能寺で明智光秀に害せられた。從つて遂に馬狩りも果さなかつた。

神馬は今も山中深くに住んで居るといわれて居る。

濃ケ池（駒ケ岳）

中央アルプスの秀麗なる西駒ケ岳の山中に神秘な藍色をたゝへた底知れぬ池がある。人々は、「濃ケ池」と呼んで居る。

池のほとりには大きな一本の柳がさながら、狂女の髪の毛のやうにふるへて居る。

むかし、山麓の大原といふところの豪農に美しい娘が居た。雪よりも白い肌、豊かな黒髪、紅い唇――すゞいほどの美しさは山の男らの憧みのまとであつた。

花はづかしい年頃が來たので婿選びが始まつた。近郷近在の若者らは自分こそはと夢中になつた、が、幸福のくぢを引きあてたのは村一番の働き者の若者であつた。

人々の羨望のうちに盛大な婚礼が挙げられた。ところが、次の朝、婿は真青になつて逃げ帰つてしまつた。

次に選ばれた花婿も逃げた。第三の男も逃げた。誰一人として長つゞきする者がない。

娘は悲しかつた。なぜ男たちが自分を嫌ふのか分らないだけに悲しかつた。そしてふくよかな頬も目立つて痩せていつたけれども、彼女の美しさは益々増した。

『怖ろしい女だ。あんな美しい顔をしてゐるが、夜半になつて見ろ、寝姿の怖ろしいことつたら――髪は一本づつ逆だち頭にはにようきにようきと角がはえるんだ。鬼だ。鬼娘なんだ。』

逃げ去つた婿たちの口からこんな噂が語り傳へられた。

両親も驚いた。ことに娘の悲しみは大きかつた。泣いて泣いて泣き死ぬほどに悶へ苦しんだ。

月の美しい夜であつた。娘は家を抜けだした、道端の柳を手折つて杖にして、山へ山へと分け入つた。

駒ケ岳の山中濃ケ池にたどりついたのは翌晩であつた。やつぱり月は美しく冴えて居た。池の面は月光を千々に碎いて居る。娘は、そつと水の面に姿をうつして見た。

『あッ！』

悲鳴をあげて倒れた。

惡鬼よりも怖ろしい自分の姿を彼女は始めて見たのだ。娘は氣も心も狂ふて池に身を投げた。

時ならぬ波紋が一つ大きく擴がつて月光は銀鱗のやうに輝いた。が、暫くすると池は、またもとの神祕と靜寂とにかへつた。

この池には昔から主が住んで居た。美しい娘に戀をして彼女に角をはやして人から嫌はれるやうに仕向け、更に、娘を池の中に呼びよせたのである。

娘が殘した枝の柳は岸に逆さの芽を吹き枝をのばした。

その後——人々はこの柳を神にまつり雨乞ひをするやうになつた。

今も登山者が池のほとりを通ると世を墓ふて娘が水底に機を織るをさの音がしのび泣くやうにひびいて來るといふ。

義犬塚（西駒ケ岳）

西駒ケ岳の麓に、寶積山光前寺といふ寺がある。別名を駒ケ岳山とも稱してゐる。

信州天臺宗五大寺の一つで、舊寺領六十石であつた。寺内の不動尊と、寺から一里半、谷入りの不動の瀧とは靈驗と奇觀とをもつて世に知られてゐる。

毎年三月二十八日が不動の緣日であるが、ことに七年に一度のちごの舞は境内泉水のうちにしつらふ舞臺の風致と、高僧の大磐石の讀經があるので、參詣者が多い。

その不動尊近くに青苔の深く覆へる墓石があつて義犬早太郎を祀つてあるので義犬塚ともよんで居る。

昔——駒ケ岳の山犬が光前寺の緣の下で五疋の仔犬を育てゝ居たが、仔犬が成長したので、山に歸ることになつたが和尚のもとにそのうちの一疋を殘して行つた。

和尚はこの犬を早太郎と名づけて愛育したが大きくなると非常に勇ましい、それでゐて素直な敏捷な性質の犬であつた。

その頃——遠江國府中、今の見附澤の、天滿天神社の廟に怪獸がすんで居た。

お祭りの日が來ると里の美しい娘の居る家に白羽の矢を立てた、その家では泣く泣く娘を人身

御供にしなければ怪獣は村の農作物を荒し一年間を無作で苦しめられねばならなかつた。

秋が來た。白羽の矢が立てられた、十九歳の美しい娘は涙にぬれつゝ櫃に入れられ、村人達におくられて祠に行つた。暗の夜、村人がさゝげるかゞり火が赤く燃へた。

祠の前に犧牲者を供へて村人は去つたが、娘の愛人はひとり殘つて木かげにかくれて樣子をうかゞつて居た。

夜半だ。あたりは死の如き靜寂となつた。一陣の颯風が吹き起り祠の扉が物凄く震動したと、思ふ時、眼光炬のやうな三怪物が現れ櫃のまわりに嬉しさうに踊り出した。すると、一怪物が云つた。

『信濃の早太郎が今夜來ることはないか。』

別な怪物は答へた。

『大丈夫だ、來やあしない。』

これに安心したのであらう、たちまちに櫃をこわし娘を抱へると祠の中に這入つてしまつた。

里に逃げ歸つた若者は娘の最後を訴へた。そのあとで云つた。

『怪物は信濃の早太郎といふ人を怖れて居る。私は信濃に行つてその豪傑を連れて來やう。村のため、人のために怪物を退治して貰ふのだ。』

若者は直ぐに旅裝を整へて山河を越へて信濃に行つた、そして早太郎といふ者を探し歩いたがどうしても逢ふことが出來なかつた。

たづねあぐんで、伊那の郡を旅をして來たある日のこと、宮田澤の茶店に休んだ。

お婆さんがお茶を運んで來たのできいた。

『このあたりに早太郎といふ人は居ませんかね。』

『早太郎——犬なら早太郎といふのが上穂村の光前寺に居ます。けれど、人にはそんな名の人は居ないやうです』

『犬ですか——』

若者は失望した、が、思ひあたる節もあるので直ぐに光前寺に行つた。そして、住職に逢ふて

怪物のことを語つた。

『怪物が怖れて居る早太郎といふのは、このお寺の犬に違ひありません。村人のために是非犬をお貸し下さいまし』

懇に願つた。

住職も、不思議なこととは思つたけれど、こゝろみに犬を庭前に呼び寄せて、さながら人に物語るやうにして事の次第を物語つて、

『どうだ、お前は行つてやるか』と、きいた。

早太郎は耳を垂れ、尾を振り動して、承知するやうな素振を見せた。

『それなら連れてお出なさい。』

『有難うございます。』

若者は早太郎を連れて村に歸つた。

春の祭りは來た。白羽の矢の立つた家の娘の身がわりに、早太郎を櫃に納め村人はこれを送つて祠前に供へた。

夜半は來た、怪物共はいつものやうに櫃のまわりを踊りながら云ふ、

『信濃の早太郎は今夜來ることとはないか。』

『來るもんか。』

そこで怪物共は櫃をこはして、犠牲をとらへやうとした。

瞬間！　一聲高く叫んで躍り出た早太郎は、怪物と物凄い爭鬪を演じた。早太郎は勇敢であつた。遂に怪物共をかみ殺した。しかし、早太郎も怪物の鋭い爪に裂かれて哀れにも鮮血に染まつて悲壯な死を遂げた。

怖ろしい夜は明けた――村人が行つて見ると怪物といふのは大きな老猴であつた。村人は早太郎の死骸に感謝の涙を捧げ怪物の死んだことを喜んだ。

早太郎の遺骸は、ことわけを添へて信濃の光前寺にかへし、こゝに埋められ今も香煙の絶ゆることがない。

住職一實坊辨存は、謝恩のため自ら六年の歳月を費し、大般若經を書寫して光前寺に奉納した。その書首には正和五丙辰卯月八日と記されてゐる。

駒ケ池（西駒ケ岳）

西駒ケ岳には駒の足跡が澤山に殘つてをり、不思議な駒の姿を見ることがあるといふ。

一說には駒は南アルプス聖見岳の薬梨原といふところの池から飛び出して高い峰へ走り去つた、それで山を駒ケ岳といひ、池を駒ケ池と呼ぶやうになつたのだといふ。

駒が出た池は大昔、建御名方命が往來せられた地だが命は一夜大出水とともにこの池をはなれ諏訪湖のほとりに移られた、が、時折、この地をなつかしと偲ばれて年に一度は必ずお歸りになつたと傳へられ更に椀貸穴の不思議がある。

昔、村人が必要な際は一日前に池の主に祈願をすると、朱膳朱椀が池の面に必要なだけ浮びあがる。

村人たちはいつも池の主に感謝した。

庄屋の家で借りた十人前の朱椀の中、あやまつて一つをこはした『申わけのない事を致しました。』と、謝罪をして九つだけ池へかへしたが、いつもならば返した器は自然に水底へ沈んでゆく筈なのに今度にかぎつて幾日たつても沈んでゆかなかつた。

庄屋は仕方なく拾ひあげて家にしまつておいた。すると、突如、池の水が溢れ出て庄屋の家は流されてしまつた。

炭燒小屋の頃（西駒ケ岳）

いつの頃か——

西駒ケ岳の山腹が眞白に彩られ、身を切るばかりの吹雪の夕暮。

身に數ケ所の傷を負ふた一人の若い武士が、白雪を血汐で紅く染めながら喘へぎ喘へぎ山奥へわけ入つて來た。

山合ひの、稍風當りの靜かな處に小さやかな炭燒き小屋があつた。若い武士はそれを見ると轉げるやうに其處へ這入つて行つた。

『まあ！』

と、吃驚して立上つたのは竈の火を燃やしてゐた若い娘である。彼女は滅多に人間の顏を見ることもないこの山奥に、突然降つて湧いたかのやうに若侍が這入つて來たので、赧い顏をしたまゝもぢ〳〵としてゐた。

炭燒きの源さんは流石に落着いてゐて、この口も利けない程痛手に惱む武士を、娘に手傳はせながら何奥れとなく介抱した。

その日から、若い武士はこの炭燒小屋に滯在することになつた。源さんは勿論、わけて娘は親切に世話をした。娘はおくまといつた。

やがて春が來た。淋しい山奥にも花が咲き、若芽が萠えて、鶯の聲が朗らかに谷間を渡るやうになつた。

武士の傷はいつしか大分癒えてゐた。そしてそれと同時に、おくまとの間にやさしい純な戀が芽ぐみ始めてゐた。

さうした二人の仲が、狹い小屋の中で、勿論、源さんの眼に留まらぬ筈はなかつたが、しかし娘可愛さに源さんは默つてゐた。

夏近い日であつた。二人はいつものやうに樂しく語合ひながら、山道や谷間などをそゞろ歩きしてゐたが、武士はふと一ところ、凹地になつた場所に激しい地熱を感じて、戲れ半分に其處を掘返して見た。すると、意外、そこからは暖かい湯がこん〳〵と湧き出て來た。

『おゝ、湯だ！　湯だ！　鑛湯だ！』

武士は驚喜しながら、まだ傷の癒り切らない身を湯の中に浸した。

鑛湯の利き目は眼に見えて武士の體を恢復させて行つた。日ならずして彼は以前にも優る强く立派な若武者となつた。おくまは愛する人のこの本復をどんなに喜んだであらう。

だが、武士の心は動搖し始めてゐた。おくまを得て、一度びはこの山奥に朽ち果てゝもよいと

まで思ひ詰めた心が、いま身の健康を取返すにつれ、彼は再び劍戟の巷を思ひ出し、そしてそこに醸される息詰まるばかりの昂奮と緊張との交錯した雰圍氣とに、物狂はしい迄の愛着を呼び醒ましまされて來たのだ。

おくまは可愛ゆい。しかし、劍と熱に生きる武士が、かゝる山奥の炭燒小屋に朽ち果てて何としよう。つひに意を決した彼は、或る夜ひそかに山を降つて了つた。

戀人に叛むかれたおくまは、半ば狂氣して毎日その人の名を呼びながら山や谷合ひを探し廻つてゐたが、遂にそれが徒勞なのを知ると、彼女は絶望と悲歎のあまり、彼の靈湯の湧き出る泉へわれとわが身を投げ入れて了つた。

それから、湯は湧かなかつた。今もなほ僅かに名ばかりを留めた湯のあとが殘つて居る。

熊　狩（西駒ヶ岳）

日本アルプスを唯一の目當に生活してゐる數多の獵師達は狩獵解禁と共に山麓各所をばつしようし獲物をあさつてゐるが、最近は鳥類の外に獸類の繁殖も多いので大喜び、ところで、例のカモシカは法度で撃てず、さりとて、兎やさるではしれた高、そこで獵師の目標となるのがくまである。

烏川國有林や鍋冠附近には時々二三十貫もある大くまが飛び出すので、營林署でもくま狩りの計畫をしてをり、木曾楢川の古畑彌治衛門といふ獵師も、駒ヶ岳山中で目方二十一貫の大くまを一發で射止めた。くま狩りは多く山が雪にとざされ、くまが穴ごもりをしてゐる頃決行される——

——これは雪についた足跡をたよつて穴を搜がすのに都合がいゝからだ、彼等が餌をあさりに出沒する時が、一層獵師の目に入り易く、從つて捕獲される率も多い。

くまも途中曲り角などでバツタリ出逢つたりして向ふを驚かさぬ以上、決して危害を加へることなく、大てい向ふが人くさいにほひをかぎつけ逃げてしまふ。しかし獵師はくまを見つけたら決してそのまゝ見逃しはしない。ズトンと一發ブツ放す、鐵砲も一發で見事命中すればいゝが、

間違つたら最後、くまは高く叫んで肉迫してくる、手負ひのくまほどあぶない、雪上、命をまとにくまと人間の爭鬪が演ぜられる。さういふ時、人はあはてずぢつと同じ姿勢をとりくまが勢ひよくつゝかゝるを待つ。くまはいさ飛びかゝらうとする時は必ず、後脚で立ち前脚の爪で一撃を加へようとするからその立あがる瞬間、第二發目を身を反らし、月の輪を打ち込むのださうだ。くま撃ちはその呼吸と度胸が大切だ。

手負ひのくまは人を見ると必ずやつゝけるといふが、又危險なのは子くまを持つてゐる母くまで、子の可愛いさからそれこそ向ふ見ずに飛びだして來て、猛烈な勢ひで暴れまはる。よく獵師が鋭いくまの爪で身體を八つ裂にされるなど、せい慘な死體となるはこの子持くまに向つた時である。かくて射止めた大きい奴を喜び勇んで籠にかつぎ下ろすと聞きおよんだ村の衆は、あつちからも、こつからも集まり、くま公の殘骸を圍んで急に景氣のいゝ酒もりが初まり。功名談が擊高らかに語られ、たらふく飲んだ村の衆は握りこぶしで水鼻をこすりながら鼻うたで雪の道を家に歸る。これこそ、山國のみに見る劇的シーンである。

かうして山籠の村の衆はくまのとれる頃になると、有難い酒にありつき、獵師のふところもふくらむので雪にくるしめられつゝ活氣づくのである。

墓所に立つ女（寶劍山）

昔――寶劍山籠に――まだわづかに溫泉宿の名をとゞめた村のあつた頃、旅から旅へと流浪する旅役者が病を得て避暑に來た。月見草ほの白くさく夜のこと、彼は高原にさゆる月を愛しつゝ散歩に出た。

いつと知れず墓所まで來た時彼は立すくんでしまつた、青白い月光を浴びて、そこには美しい女が立つて居る。見ると、女は手に赤ん坊の死體を抱へてその赤ん坊に食ひついて居る。黑髪はあやしく戰いてる。

女は彼を見るとにたりと笑つた、唇からこぼれた齒が水晶の如くに光つた。旅役者は卒倒してしまつたが、村人に發見されて助けられた。

墓所で死體を食ふ女は村の相當な家の嫁さんだが可愛い子を失つた悲しみのあまり發狂した。そして夜になると墓を發いて死體を抱きしめるのである、どんなに深く埋めても堀りだすのだ。

旅役者は死體に頬ずりをして居るのを見て、死體を食うて居るのだと思つたのだつた。その後旅役者はこの事を藝題にして、すごい芝居を演じて各地で大入を占めたといふ。

手塚の里（丈念岳）

松本平を南してつくるところに中央アルプスの霧訪山、經ケ岳、西駒ケ岳、丈念岳、惠那山の連峰が南北に屏風をひろげたやうに横はつて居る。栗津の露と果てた源義仲や巴御前はこの山水が生んだ英雄である。

丈念岳の山ふところに抱かれたところに手塚の里といふ郷がある。

木曾義仲が勇名をはせて居る頃――この里に手塚太郎光盛といふ義仲の家來が居た。

山峽に生れた娘ではあつたが、美しい唐糸の前といふ娘が光盛にあつた、まだ純なる十八歳の

時に鎌倉に召されて頼朝につかへた。

父は朝日將軍義仲に、娘は源氏の總帥頼朝に、道こそ違へ、夫々につかへて居る中にも、義仲の專横は次第に激しくなつて行つた。

壽永二年の秋の頃、頼朝は義仲の振舞を憤り、とうとうこれを攻める事に決心した。お側につかへて寵をうけて居た唐糸は、父の主を思ふの餘り、事の由をこまゞゝと書き、その上父の光盛に、信濃と越後の二國を授けてくれるなら、頼朝を亡きものにしてやるから、木曾重代の脇差を賜はれと言ひ送つた。義仲は一時は驚きもしたが、やがて唐糸の願ひを聞き入れて、ひたすらにその謀の成功する樣に祈つて居た。

それからと云ふもの、唐糸は、明けても暮ても、よい折もがなと頼朝の身邊を狙つて居た。

或日の事藥風呂をたてた時遂に風呂奉行土屋三郎に脇差を見付けられて訴へられて了つた。訴へによつて頼朝は唐糸を不審に思ひ松が岡殿にあづけたところがその後になつて土屋三郎が唐糸の室から義仲からの密書を見付け出して頼朝に事の由を告げた。頼朝は益怒りに燃えて唐糸を召

し出してきつく詮議をしやうとしたが松が岡殿は頼朝が禮を缺いてゐるのを憤つて唐糸を召に應ぜしめないでひそかに信濃へ送り歸さうとした。然し不幸なことには、唐糸は歸國の途中梶原景時に行き逢ひ再び鎌倉へ送り歸され石の牢にとぢ込められて了つた。

唐糸の郷里の手塚の里では六十に餘る祖母と、十二になる妹の萬壽姫とが淋しく暮して居たが風の便りに唐糸の噂を聞いた時、萬壽姫はまだ物事の辨へもつきかねる樣な年頃であるのに、健氣にも、鎌倉へ上つて召使ひになり、その間に唐糸の樣子を探つて助け出して、祖母を安心させやうと考へ、そのことを乳母の更科に打明けた。更科は其孝心に感じ、どこまでも供をして萬壽の身を守らう、とこれも決心の臍を固め、その夜すぐ、鎌倉に向けて出發した。

夜が明けて萬壽が居ないのを初めて知つた祖母の驚きは一方でなく、すぐ樣その後を追つて漸く雨の宮といふ所で追ひ付き、泣いて鎌倉行を止めさせやうとしたが萬壽は決心を飜しさうにもなかつた。いくら留めても無益だと悟つて祖母はそれ程に堅い決心をして居るならば、といつて伴につれて來た五郎丸を萬壽に添へて泣く〳〵別れた。

ふかしの里を過ぎ、淺間の煙に思ひをよせつゝ、上野武藏を過ぎ、三十二日目に一行は無事に鎌倉に着いた。そしてそのあくる日にはすぐ樣そのことを認めて五郎丸に持たせて國元へ歸らせた。

さてその後萬壽は、つてを求めて鎌倉に奉公することになつた。二十日ばかりといふものは悲しんだり、疑つたりして氣を揉んだが、その中に石の牢のありかも姉の安否も耳にすることが出來たので此上はたゞよい折もがなとひたすらに神かけて時の來るのを待つて居た。

三月廿日の鎌倉山の花見の日となつた。御やしき中總出で、館には人つ子一人も居なかつた。時こそよけれと、萬壽は石の牢の前でなつかしい姉に逢ふ事が出來た。二人は夢かとばかり喜び の涙にくれた。然しながら石牢の冷たい格子にさへぎられて抱き合つて共に喜ぶ事も出來ずたゞ明けるに近い春の夜の名殘を惜みつゝ語り合ふのみであつた。

その翌年の正月二日頼朝祈念のしゝの間の疊の緣に六本の小松が生えた。阿部なかもちといふ卜師を召してトなはせた『松は千歳の齡あれば、君は千代を重ねて、六本の小松にて六千歳榮え

行くためしでございます鶴が岡に相生の松が枝を移し、十二人の處女を求めて今樣をうたはせて神德をことほぐがよろしからう』と卜師は答へた。

頼朝は大層喜び早速處女を選んだ、十二人まで選んだが今一人といふ所で然るべき處女がなかつた、これには頼朝も困り果てゝ居た。

乳母更科は此時とばかりに局へゆき、萬壽が今樣に堪能である事を申し出た。そしてとう〳〵萬壽は十二人の處女の最後の一人として選ばれたのである。

さて今樣の舞は始まつて一番は手越の長者のせんじゆ、二番はきせつのかめづる、三番は遠江國ゆがや娘しゞう、四番は武藏國入間川の白拍子ぼたん五番が愈萬壽の番に當つた。

萬壽は花のまひ袖をひるがへし、小松の枝をゆりかつぎ、聲もほがらかになよ〳〵しく、歌ひ舞つた。そのやさしい舞姿には頼朝もさすがに我身を忘れる程に恍惚として了つた。感極まつて自らも立ち上つて萬壽と共に舞ひ興じた。そして歡樂と瑞喜のどよめきの中にめでたく祭の式もすんだのであつた。

祭がすんでから萬壽姫は頼朝に姉を助けて貰ひたいと頼んだ。

頼朝も可憐の少女の願ひをゆるした。そればかりではなく引出物として信濃國手塚の里一萬貫の地所を下され御臺樣からは、黃金一千兩ふしのゆひわた一千束贈られ、大御所からは砂金五百兩みの〵じやうほん一千匹を與へられた。そして早速暇をとらせて姉妹諸共信濃國へ歸された。

姉と共に里に歸つた時、祖母の喜びは大きかつた。

そして山峽の里の平和な春、秋はすぎてゆき、萬壽姫の容姿はいよ〳〵美しさを加へて行つた。

3 南アルプス篇

足利調伏（赤石岳）

飛驒には、昔から、高貴の方の御入國のあつたことが多い。吉野朝五十年の爭鬪の記錄に最後の頁を殘し給ひし後醍醐帝第四皇子宗良親王は興國四年冬、北條時行、諏訪頼繼、高坂高宗等に奉ぜられ、遠江國伊谷城を出でさせられて、信濃から越後へ、越後から越中へ、越中から又信濃國に入つて、伊奈の奥に永く幽居せられた。しばしば赤石岳の頂上にて足利氏調伏の禱をなし給ふた。

英雄の涙多き胸中は今も耀く山頂の星ぞ知つて居やう。

親王は三十餘年、此地に住ひ給ふて薨去遊ばされた。

その越中の奈古から、興國四年の二月のころ信濃の伊奈へ山越えせられた道筋は、飛驒の國に入つて高原川に沿うて上り、神坂から信州の島々谷へ越えさせられたものと推定されるが、何等それを確かむべき證査となるべきものはない。その時の親王の御歌に

きさらぎのころ山を越え侍るとて

梅が香に花のあたりを行やらで山路くらせる春風ぞ吹く

うめが香の嵐にたぐふたびごとに人をも花やまたさそふらむ

この二首の梅が香の御歌は、嶮しき飛驒の山路に惱ませられた折の御感想を漏らさせられたものと推察される。その神坂は、高原川の一支流蒲田川の右岸で、蒲田川と高原川の合流點の今見から上流半里、更に上流半里に蒲田溫泉場がある。その蒲田からは、怒りの火焔を噴く硫黄嶽の側面を越えて、信州の上高地へ三里の上下路である。

その今見と神坂の中間の栃尾で蒲田道と平湯道とが岐れて、平湯へは蒲田川に架けた長い橋を渡つて高原川の本流に沿うて行く。橋を渡つた處に聳ゆる山を『みかど山』といひ、道に面して

村上神社が鎮座して居る、古縁起には村上天皇御位をすべらせられ、此地に隠れまし〳〵たことも傳へてゐる。

大小寺平（赤石岳）

赤石岳に流れる荒川に石を投ずることを山の案内者達は非常に怖れる。

山神の祟りで山が荒れるといふのである。

山の中腹に大聖寺平といふ所がある、大小寺平と書く人があるが何れが正しいかわからない。

山でなくなられた良月親王の遺骨を足利勢に奪はれることを恐れた南朝の遺臣が遺骨をこゝまで背負ひあげて埋葬申し上げたと里人は云つてゐる。

一説には親王の御守刀の大小（刀）を埋めたから大小寺平であるといふ人もある。

赤石連峯の小河内岳には、古來天狗が住んで居ると傳へられ登る人がなかつた、ことに大河原口から見上げる斷崖絶壁は實に嶮しいので、到底、登れない山とされて山岳巡禮者にはこれまで

餘り顧られなかつた。それが大正四年七月東京天文臺所員小倉伸吉氏によつて始めて足跡が印せられたが、山の新しいことは殆ど處女山岳と言つてもよい位なものである。

猿（赤石岳）

日本アルプス一帯に棲息してゐる猿は、くまやかもしかなどと同樣非常な繁殖ぶりで、群をなして押し歩き、過ぐる年營林署員が彼等惡戯者に包圍され、素手の悲しさ、殘念ながらそのまゝ逃げ歸つたとのことだ。ところで、その猿があのやうな眞赤な顏をしてゐるわけについて、山麓各地には次のやうなことが口碑されてゐる。

さてその話といふのは、太古、赤石岳にうき世はなれた老夫婦が住んでゐた。

その小屋は數十年も前に造られた丸太づくりの事とて、屋根などほとんどなく、寢てゐても春夏、秋、冬の月見が出來る有樣、天氣の時はそれでいゝとしても、爺さん婆さんを困らせるのは雨降りの時であつた。

『世の中に古家漏る程恐ろしいものはねえづら』ある夜のこと、老夫婦はほだ火を燃やしながら語り合つてゐると、さつきから夫婦をとり食らはうとてやつて來た一匹のおゝかみは『世の中におれより強いものはないと思つてゐたが、さては古屋漏るといふ恐ろしいものがゐるのか、あぶないこつた。そのおれより恐ろしい古屋漏るの來ねえうち退却せにヤ……』とばかり、一目散に逃げのびた。

程なくそこへ現はれたのが古屋漏るならぬ猿だ。この猿はあの有名な話――狩人に親猿を捕はれ、その小猿どもが眞夜中圍爐裏の側で手をあぶつて介抱したので、狩人もその心根に感じそれから殺生をしなくなつた――といふその數十代前の猿なのだ。早速、家の樣子をうかゞふと老夫婦は相變らず古屋漏るの恐ろしい話をしてゐた。惡戯好きの猿、とも角しり尾を家の中へさし込んで樣子を探つて見ようとさる智惠をしぼつた揚句、長い尾をぬつとつきいれた。

驚いたのは爺さん、婆さん、聲も立てずにその長い尾を力まかせに引つ捕へた。こちらは猿さては恐ろしの『古屋漏るがゐるぞ』とばかり滿身の力をこめ、その尾を根元からひつ切つて山奥

深く逃げ込んでしまつた。それ以來、さるの顏はあのやうに赤く尾は短くなつたんださうな。

赤石の名（赤石岳）

白峰が雪に因める名であるやうに赤石は岩から導かれた名である。白峰に赤石、何といふ好い對稱であらう。けれど名にし負ふその赤石は、山頂を構成する淡赤褐色の硬砂岩よりも、寧ろその南麓を流れてゐる赤石澤に多く露出するラヂオラリヤ板岩を指したものらしく、血紅色を呈した美しい岩である。その岩が多い爲に赤石澤と呼ばれ、其の澤から赤石岳なる名が生れたものと思はれる。

山椒魚（赤石岳）

南アルプスの赤石岳の山中の小川には山椒魚がたく山すんで居る。

登山家など天幕に寢て居ると、人なつつこい山椒魚が、のこのこと這ひ込んで來て騷がせるこ

とがある、飛驒山中のそれとは異つて身長五六寸いもりによく似てゐるが、見かけによらず、愛嬌に富んでゐる。

昔――江戸の香具師が二人見世物にするために大河原にこの山椒魚をとりに來た。どうしたはづみだつたのか喧嘩を始めた。遂には必死の大格闘となつて一人は組み伏せられ咽喉をしめられて殺された。

惨虐性に富んだ對手は、死體を高手小手にしばつて木にぶらさげて下山した。

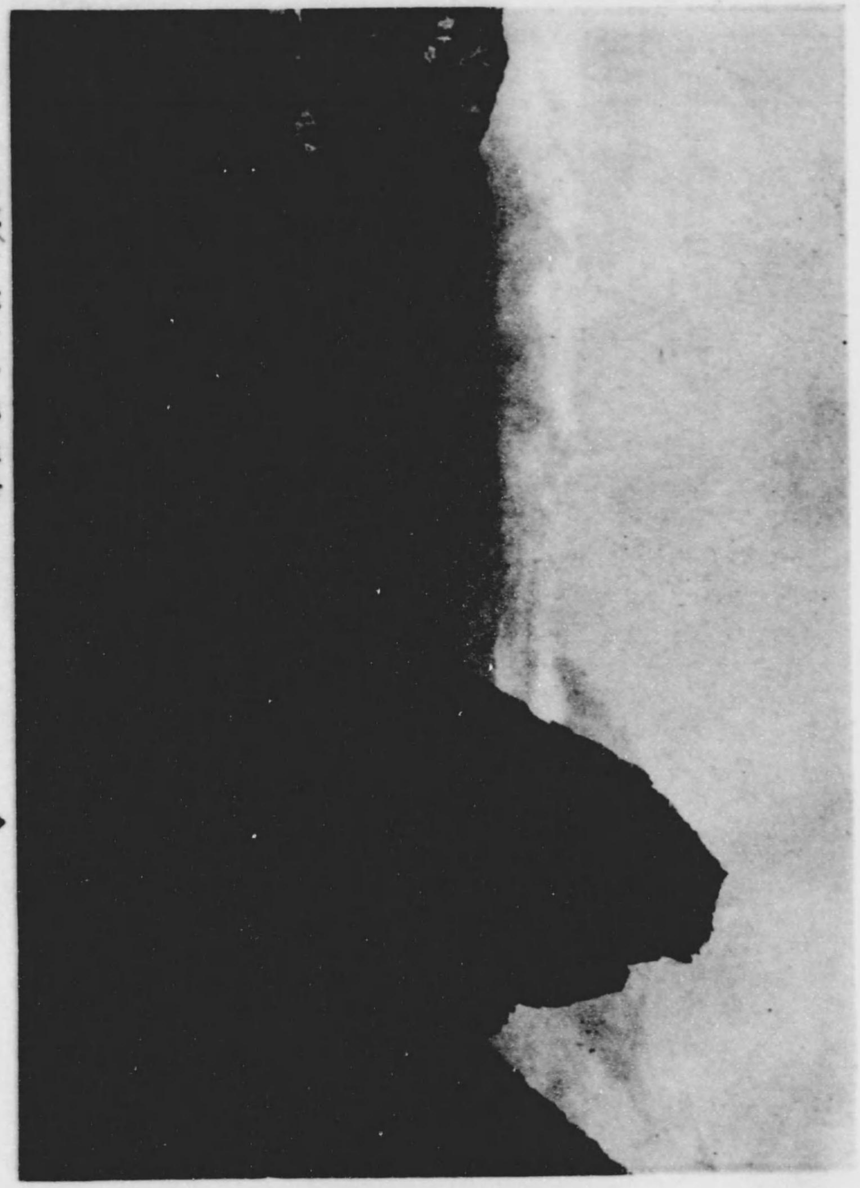
翌年、山椒魚を取りにそこにゆくと、白骨と化した死體は、無氣味な恰好で枝からぶらさがつて居た。

『お前、まだそんなざまをしてゐるのか！』

一喝すると、白骨はぐらぐらと崩れて落ちて來た。

それをよけやうとした男は川に落ちた、山椒魚に噛みつかれて死んでしまつた。

山椒魚の祟りだと云はれて居る。



スプルアンス北方に見らか所

→

眞菰ケ池（高鳥谷岳）

南アルプスの盟主赤石岳に近き伊那の谷の東、高鳥谷岳の山のふところに、面積からいつたら三町二段歩ばかり、靜かに碧く澄んでゐる沼がある。沼の名は眞菰ケ池、この、きくも優しい名の眞菰ケ池には、祕められた哀しい物語がある。

時は天正十二年、武田の家臣櫻井安藝守重久は、鬱勃の覇氣を抱きながら、信濃高原の宰領地に空しく閉ぢこもらなければならなかつた。猛將の聞え高い重久、戰亂の世にあつて何で安閑とした日を滿足して居られやう。覇氣の遣り場に悶え、腕の高鳴りを持て餘す彼は、自然酒を呑んでさうした鬱を紛らせやうとした。來る日も來る日も大酒に醉ひしれては、僅かに胸中の不滿を忘れてゐた。

冬の或日、例の如く大盃を手にした重久は、ふと滿山の雪を眺め、

「おゝ、白皚々の眺めも又格別ぢやな。好矣、猪狩りでも催してこの悶々の鬱を散ずるとしよう

誰かある、馬曳けッ。」

と、忽ち席を蹴つて立上つた。家臣は直ぐさま愛馬の鹿毛を曳き出して來た。

重久は野袴に身仕度を調へ、重藤の弓を小脇に、家臣を隨へながら高鳥谷岳の奥深く獸を狩立てるのであつた。

だが、どうしたことであらう、その日に限つて、兎一匹の獲物もないのである。暮るゝに早い冬の日は、既に峻峯駒ケ嶽の背へ落ちかゝつて來た。重久は思ふ獲物の得られぬ不滿さに苛苛しながら、止むなく山を下つた。

重久主從が暮の殘光を浴びながら默々として山の麓、眞菰ケ池まで來た時である。靜かに、鏡の如く澄んだ池の汀に、仲睦まじく遊ぶ二羽の鴛鴦があつた。重久はこれを見ると、馬の歩みを留めて小脇の弓を取直すと、忽ち一本の矢をつがへて引絞つた。

「殿、殿」

家臣は慌てゝ鹿毛の轡を控へた。

「殿、あの鳥は此池の主と里人から畏れられてゐる鴛鴦、滅多なことを爲されては後の祟りが恐しうございます。」

と、面を冒して諫めたが、然し重久は肯かなかつた。矢は風を切つて池の面に飛んだ。一聲悲しい叫び、あはれ鴛鴦の一羽は重久の矢に射られて水中に漂つたのである。家臣も今は仕方なく池の汀に至り、鴛鴦の骸を拾ひ上げたが、

「お、この鳥には首がありませぬぞ。」

と、驚愕の叫びを上げながら重久の前へ持つて來た。矢は美事雄鳥の脇腹から心臟を射貫いてゐるのに、不思議や其首は何者かに咬み切られた如くなつて紛失してゐた。

「うむ、稀有な事ぢや。」

重久は只一言かういつたきりだつたが、しかし、その胸は無益な殺生を悔める氣持で憂鬱になつてゐた。

その夜更け、重久は寢苦しいまゝに幾度か寢返りを打つてゐると、ふと、表門の方から哀調を

帶びた女の歌聲が聞こえて來た。審しく思つた重久は、床の上に上半身を起してぢつと耳を澄ますと、その歌聲は、

櫻井の名もうらめしき甲斐沼の眞菰ケ池に殘る面影

といふ一つの歌になつて、そしてそれが繰返し繰返し歌はれるのである。綿々とつきざる怨みを含んだその調子。重久は枕元の一刀を取直すと、足音を忍ばせながら表門の方へ行つた。

だが、重久が門を開けた時にはもう歌聲は消えてゐた。靑白い月光が雪の上に照り輝き、夜半の外氣は冷く凍りついて、天も地も一樣に不氣味な沈默をたゝへてゐる。奇異の思ひをしながらも寢所へ歸つた。

するとその翌夜、丁度前夜と同じ時刻になると、又しても哀しい歌聲が洩れて來た。重久は再び門の外へ出て見たが、しかし矢張その正體を摑むことは出來なかつた。歌聲はその翌夜も、又翌夜も聞こえて來た。『眞菰ケ池に殘る面影――』かの、何時ぞや射止めた首の無い鴛鴦のことを思ひ併せて、重久ははげしい自責に襲はれた。

その翌年の春、櫻の花が麗光を浴びて雪の如くに咲き盛る頃、武人の重久にも流石に和やかな氣持が湧いて來た。一日彼は家臣達を集めて眞菰ケ池の程近く、觀櫻の酒宴を催したのである。

池のほとりには今を盛りと咲き亂れる櫻が、その華麗な姿を靜かな水面に映してゐた。重久は侍女が捧げる酒盃を手に、陶然として四邊の風情を愛でてゐたが、ふと、池の面を見遣ると、彼方の汀に一羽の鴛鴦が、何か淋し氣な姿で浮かんでゐるのを見付けた。その瞬間、慘忍な衝動が彼の血を騷つた。重久は傍の弓矢を取上げるなり、家臣の留める暇もなく、ヒュッと矢を射離した。

矢は見事に鴛鴦の心臟を射貫いてゐた。雌鳥であつた。重久が鳥の骸から矢を拔かうとした時である。羽搔ひの中からバッタリと何物かが落ちた。見ると、鳥の首――しかも前年の冬、この池で射止めた雄鳥の紛失したその首ではないか。

流石剛勇の重久も『ウム！』といつたきり暫しは言葉もなかつた家臣達も今まのあたり見たあまりな奇怪事に聲を立てる者もない。

由來、鴛鴦は雌雄の情合ひ濃やかだといふ。かの冬、雄鳥を打たれた雌鳥は、悲しみの餘りその雄鳥の首を掻き切つて、かうして今日まで長い間羽搔ひ下に抱きしめてゐたのでもあらうか。

重久は、かの夜毎にわが門前に來て『眞菰ケ池に殘る面影』の哀歌を唄つたのもこの雌鳥だつたやうな氣がした。――玆に至つて重久は茫然と宇宙人生の無情を悟り、武人の夢も醒めはて、其場から頭を丸め、この悲しくも殉情の鴛鴦のため、高鳥谷岳の麓に伽藍を建立し、寺號を東光寺と名付けてこの鴛鴦の靈を祀つた。

その東光寺には今もなほ、口碑として、鴛鴦の歌に和した重久の、

日暮れなばいざと誘ひし甲斐沼の眞菰ケ池の鴛鴦の獨り寢

といふ歌が殘つてゐる。

高遠の繪島（伊那）

徳川七代將軍家繼の時、正徳四年に起つた繪島事件はあまりに有名である。だが、繪島が江戸

を遠流されてからの配流後の生活を知る人はすくない。

正徳四年二月四日、幕府が發表した繪島及び生島に對する罪科は左の如くであつた。

一、俵島流罪（伊豆三島から海上三十餘里）　御年寄　繪島

一、三宅島流罪　長太夫抱役者　新五郎

繪島に對する宣告書の末記に『御慈悲をもつて命を助け遊ばされる……云々』とあつた。

繪島の兄白井平右衛門の死刑の外、この事件に關聯して、遠島、追放、閉門、親戚に御預けなど六十七人に達し、幕府の處罰は寸分の假借も許さなかつた。

けれども、月光院のふところにとり入つた繪島の寵愛は、この醜狀暴露の後といへども、變ることがなかつた。

月光院は、老中に對し繪島の減刑を切に請ふた結果、現將軍の生母の願ひといふので、老中も遂に動かされて、配流の地を信州の高遠に改めるに至つた。

三月十二日阿部豐後守から高遠の領主内藤駿河守清牧の江戸留守宅に對し、突然言遣はし狀が

とゞいた。

　　内藤駿河守

　　繪島事、永く遠流たるはずに候間在所高遠へ遣之番人附可被差遣候。

お國替で、高遠城主となつたばかりの内藤氏の小川町の藩邸は、一層せはしくなつた。ずゐぶん厄介な科人を授けられたものだと思つたが仕方がない。

十五日に繪島は、町奉行坪内能登守から引渡され、二十五日まで嚴しい警めのもとに藩邸に止め置かれた。

その間に、江戸から甲州路に出て――高遠までの五十五里の間を運ぶ準備が進められた。

町奉行へ繪島を引取りに行つた時、使者の城戸十藏は役人に向つて、

『繪島の月經はいつごろありましたか』と尋ねたと傳へられてゐる。

注意周到な城戸は、もし孕み女を預かつて子供でも生れたあとで、公儀のお怒りを蒙つては一大事と思つて、こんな言質までも取つたのであつた。

役人は、早速繪島に聞いたのち『何れも今日まで滯りがなかつた』といふ言質を與へた。

　　浮世にはまた歸らめや武藏野の月の光の影もはづかし

繪島は、今をさかりの江戸の春に名殘りを惜んで、心ずゝまぬ旅に立つた。

三月二十五日朝、美しい科人の繪島は、籠乘物に移された。かつては大奥の御年寄として勢威並びたかつた彼女、身に綾羅綿繡を裝つてゐた繪島も、その日は、粗末な木綿着物に着替へさせられ、櫛、笄に飾られた烏羽玉の黑髪さへも、今はかざる何ものもない。堅く錠をおろされた駕籠の中に、小鳥のやうにうづくまつてゐた。

花は地に、櫻も若葉が萠えやうとしてゐる大江戸の暮春、駕籠側には給人二人、侍二人、足輕八人が護送の役にあたり、ほかに下女二人が附いてゐた。

同勢十四人一行は、夜を日についで路をいそいだ。

木曾路の山々にはまだ殘んの雪深く、櫻の蕾も堅かつた。空にさへづるひばり、戸渡る谷間の鶯も、繪島にとつては、斷腸の曲に違ひなかつた。

四月一日高遠につくと、直ぐにお城の東、一里ばかりの非持村火打平（現在の美和村非持）に新らしく建てられたお圍ひ屋敷に、牢屋住まひそのまゝに押し込められてしまつた。

高遠藩では非持村の名主に次のやうな意味のことを申渡した。

『今度、公儀からお預けの繪島どのを當火打平のお圍ひ屋敷に置くについては、大切な科人の事であるから、役目あるものは申すに及ばず、村方一統、火の安心、流浪者の徘徊その他に注意するやうに。』

そして非持村では、自警團のやうなものをつくつて、晝夜警固を嚴しくした。村人たちは、いかめしい矢來で圍まれた屋敷を明け暮れ眺めながら、その中に住む美しい女主人公について、好奇の眼を輝り、いろ〳〵の噂をした。

藩からは、中小姓一人、徒士五人が、監視として常に遣され、外に女中二人、下僕二人置かれた。

藩では、千代田の大奥を騒がせた戀の女だといふので、最初から放埒な女、淫奔な女として氣

に病んだ。監視の者が不義でもするやうなことがあつては、それこそ大變だと心配した、で、お年寄や、やかましい大目付が時どき見廻つた。

居間は一室、食事は一汁一菜、一日二度に限られてゐた。

大奥で權勢をふるつてゐた繪島、一度は戀を知つた美しい繪島、女ざかりの三十二の彼女にとつては、遣る瀬ないさびしい生活だつたに違ひない。

いつしか春も暮れて、五月雨の降る初夏を迎へたのも束の間、やがて日ぐらしの鳴く眞夏も過ぎた。けれども、繪島の心を慰むるものは何一つもなかつた、秋もやう〳〵深み行けば山々には早やくも、雪白く、木枯の音いとゞわびしい。ことに身を切るやうな冬の寒さが身にしみて辛らかつたけれども、廣い部屋の眞ん中に火鉢が一つ置かれてあるばかりであつた。

繪島の心持ちは段々と落つきがあるやうになつた、さびしさをなぐさめるには佛に縋るより外はないとさとつて來た、そして、自らを清淨に過したいと、しみ〴〵と決心した。

食物も精進日を定めて魚肉を口にしないことが多かつた、享保三年五月からは全然魚肉を斷つ

て常精進をつゞけた。

禪房にも等しい節制正しい生活は、彼女をして異性に對するさまゞの欲求をいたく減退せしめたらしい。咲いた櫻のやうに一時にぱつと開いた彼女の愛慾凡惱の世界は、かくして夢のやうに凋落した。

とはいへむかしの放縱生活によつて根深く培はれた淫奔な血が彼女の身うちの何處かをまだ流れてゐると見えて、時々、役人のお情で地酒が給されると、彼女は陶然として爛熟した三十女の心のやるせなさを痛嘆に堪へぬものゝやうであつた。

彼女のふだんの居室は八疊であつた。床の間には曼荼羅をかけ、江戸から持つて來た香をたいて、華かであつたむかしをしのぶこともあつた。隣室には女中が詰めてゐた、その次の室には監視の役人、繪島の居間縁側は勿論、便所へも湯殿へも彼女の自由に往來出來るところはみな格子がはめられてあり、屋敷の周圍は七尺から八尺のしのび返しのついた塀と竹矢來がめぐらされてゐた。

繪島の日用品は役人が一度改めてから渡した。着物は絹は許されず木綿ばかりであつた使用品も華美なものは一つもなかつた、もちろん双物は一切ゆるされず鋏さへも爪を剪る時以外にはゆるされなかつた。

單調な退屈な日と夜のみが流れた。さうした繪島にとつては、田舍育ちの女中を話對手にするのが何よりもの憂さ晴らしであつた。

江戸生活の花やかさ！　花火のやうに燃え夢のやうに消えた戀！　芝居見物の日のこと——新五郎との狂態——そんなことが、それからそれへと展開されて行つた。さうして偲び泣く日も少くなかつた。

そして、所詮は佛の御手にすがるより外はないとあきらめた。

ある日のこと。

繪島はこのあたりにどんな寺があるかと女中にきいた。

火打平の北、一里ばかりの山奥、山室川に沿うて上つたところに日蓮宗の遠照寺といふ名刹が

あつて、そこは甲州身延山の末寺で、日朝上人の開基にかゝり、日蓮直筆の曼荼羅などがあつて山門が常に榮えてゐることなどを聞かされた。

すぐに女中を使として法華經を讀つたり、佛に香華を手向けて貰つたりなど彼女の信仰生活が始まつた。

非持村の灯が消えて、夜を警める拍子木の音の冴える冬の夜などひたすらに唱名三昧に入ることが多かつた。

非持村の侘しい生活が六年もつゞいた。

領主の勝許を一里も離れたところでは何かにつけて不便が多かつたので、高遠城主から直ぐ城の傍なる花畑へ移したいと幕府に願ひ出た。

享保四年の八月十二日花畑の新らしいお圍ひ屋敷に移された、屋敷は前と同じやうに嚴重な圍ひのうちにあつたので新居に移されてもすこしもなぐさむところがなかつた。

名こそ香しい花畑であるが事實は城の東南、三峰川に向つて傾斜したところで、芒、青草、小

笹の茂つた叢の中であつた。

三峰の川瀬は絶えまずに生々流轉と響き、天正の昔戰死した仁科五郎信盛を祀つた五郎山はすぐ目の前にそびえてゐた。東南には駒ケ岳の連峰が威壓するやうな莊重な姿を青空に突き立てゝゐた。

繪島の心はいよ〳〵落着いて來た。

つれ〴〵のまゝに何か本でも讀んで見たいと思つて再三役人に頼んでみたが一度も顧ひを容れてくれなかつた。

何か書いて見たい、若いころから詠んだ歌なども集めておきたいと思つたが、これも許されなかつた。

幾年たつても監視は依然として嚴しかつた、ことに役人の心配は異性に對する熾烈な慾望を餘儀なくこらへてゐるであらう彼女の愛慾に關する間違ひであつた。

で、男子といへば、たとへば藩の年寄りや大目付が見廻りに行つても決して彼女の部屋へは遣

入らなかつた。

用事の時は必ず女中を介して辨じた。

醫者さへも一人では出入りすることを禁ぜられた、風邪の時などかゝりの醫師としてつけられた北原道玄、伊東交言の二人がお城から老職が案内して室に這入つた程であつた。

彼女の起居は極めて端正であつた。朝夕のみづくろひも怠りなく、朝起きるとすぐ髪を括つて亂れ毛一本見せず、念入りに手水をつかつた。

そして、信仰はいよ／＼深められて行つた、若々しさを求めた心も年と共に弱められて、佛に仕へる心が日に／＼強められて行つた。

花畑に來てからは冬も南を受けた暖かなところは避けるやうになつた。

かくして、江戸を追放されて三十年の月日は流れた。

美しかつた彼女も寄る年波は爭はれず華顏玉容色あせて、秋風蕭條たる六十の媼となつた。

元文五年の夏も早や過ぎて、伊那の谷々秋色濃まやかに、勝間村の稻田のそよぎにも、蕭々と

秋を感じるころであつた。氣分がすぐれぬといふて床についてゐた繪島は浮腫がまはつて苦痛を訴へた。

伊東、北原の二人の醫者は毎日診察に來た、お附の女中は終日枕邊について介抱をつくした。

秋も闌け山々に積む雪白く伊那の谷吹く寒風が窓の隙間を通して有明の灯のゆらぐ時など、寢覺め勝ちな彼女は夢のやうな數奇な六十年の生活をふりかへつて見てどんな思ひがしたことであらう！

元文六年二月改元、世は寛保元年の春をむかへた。

彼女の病も少しは怠つて來たので人々を安心させたが、四月二日から急に發熱して食慾は全く失せて衰弱が加つた。

病氣は、日々に重り手足の自由さへ利かなくなつた。醫者も、今度はとても助かるまいと匙をなげた。

繪島自身もさうしたわが身の餘命いくばくもないことを知つてゐた。もう何も考へまい、思ふ

まい。今はたゞ御佛の大きな慈悲の御手に抱かれることをのみひたすら希ふた。そして、親切に看護してくれる女中たちに對しても感謝の涙をとめどもなくそゝいだ。

四月十日、山國の春をよそに彼女の最期が訪れた。

係の役人は死後何かいひ置くことはないかとたづねると靜かに答へた。

「どうか、日蓮宗のお寺へ遺骸を納めて下さい。」

罪科人の死は無論佛事を受けられぬとは思つたが、せめて、せめて、遺骸だけでも信仰する法華寺へ埋めて貰ひたい！　それを唯一つ遺言として靜かに生涯の幕を閉ぢた。

流謫の彼女の遺骸はすぐに葬ることは出來なかつた。特使をもつて幕府にその死を屆け出で、幕府からは目付役の杉浦宗十郎、平林太郎右衛門の兩人を檢視として高遠に出向させた。二人は二十五日に到着、藩の重役内藤藏人以下係の役人に繪島の高遠における生活を巨細にたづねて一一その答書を作成した。主なる點を掲ぐると次のやうである。

（問）　道中被致如何連下り候哉。

（答）　乘物錠おろし給人二人侍二人下女二人足輕八人差添申候。

（問）　繪島平生身持如何候哉。

（答）　平生行儀宜敷如何之儀無御座候。

（問）　箸の寸法如何候也

（答）　常の箸用ひ申候。

（問）　精進日は如何。

（答）　一日朝許、三日朝許、八日朝許、九日朝夕、十日朝夕、十五日朝許、十六日朝夕（以下略）

（問）　下戸にて候哉上戸にて候哉。

（答）　酒の儀者差出不申候故相知不申候。

（問）　髮は如何候哉。

（答）　常の通繕被申候。

（問）　爪は如何候哉。

（答）爪とり候節は鋏相渡申候。

（問）せいかつこうは如何候哉。

（答）中せいより高く中肉にて御座候。

（問）夜具は如何候哉。

（答）木綿夜具相用ひ申候。

右御召被成候箇條一々御答仕候通御座候。

以上

酉四月二十五日

内藤大和守内

田村與市左衛門（外六人連名）

檢視がすんで藩では彼女の遺言により法華宗である高速在（今の長藤村的場）の蓮華山に葬つた。

爾來幾春秋、屋うつり物かはつて百八十年、蓮華寺の後丘城山の麓には、訪ふ人もなき彼女の墓石はいたづらに草に埋もれて『信敬院妙立日如大姉』の文字も苔蒸して辨じがたい。

駒の跡（東駒ケ岳）

南アルプス北部の重鎮は、東駒ケ岳である。山容やゝ金字塔形に似て然も、豪壯不羈、男性的にして峻嶮なる、多く他にその比を見ない大岳である。

全山、御影石系の岩石より成つて、所々白崩れの山はだ現はれ、夏尚雪かと疑ふばかり、麗しくも又豪壯を極めた山である。

東駒ケ岳は高山である、名山である、靈山である、神山である。古來、一度登山する者は、神德蒙らざるはなしと、いはれて居る。傳說によると、神代の昔、黑白の名馬をこの御山から產したので、この御山を駒ケ岳と呼ぶに至つた。然してまた、この名馬こそ我國產馬の祖であるといふ。

大巳貴命、さう生を安んぜ給はんとして、この名馬に召され各所に禁厭の法を修め給ふ。その際、名馬の蹄の跡を所々の岩石に殘した。今尚殘つて居るのが駒岩と呼ばれて居る。また竹宇前宮の井保石、金比羅石、途中路傍の堰口石といふ巨石の上にもその蹄跡がある。

げに神代の神馬ならでは、かゝる跡がつく筈はないと、人々は怖れて居る。

山頂に石を積み、玉垣をめぐらしたる神社が大巳貴命をまつる駒ケ岳神社の本宮である。前宮は薮の竹宇と横手とにあつて、共に神殿、拜殿、神楽殿などあり、いうすゐにして奥床しい神域である。里人の信仰がいとあつい、又駒ケ岳講をつくつて遠く京濱の各地から參拜登山するものすこぶる多い。

この御山の頂上まで山道を開いたいはゆる開山なる人は、小尾權次郎氏である。氏は武田公の家臣小尾宮内少輔の後裔であつて、幼少の頃から神佛尊崇の念深く、この靈山駒ケ岳登山道を開かうと思ひ立ち、尾白川千ケ瀧の下一二三瀧に修行して延命行者となり、それから御山に登り五合目まで道を切り開き、不動岩でまた修行を重ねて弘幡行者（役の行者ともいふ）となり、七丈

瀧、御來光場、前ノ峰等に道を求めて遂に頂上に達した。この間十年の艱難辛苦、言語に絶するものがあつた。以後山頂を極めること七十五回、文政二年卯正月十五日終に不動岩のあたりにて往生した。これ今を去ること百十餘年前のこと。位力（得力）大聖不動明王として駒ケ岳神社竹宇前宮に鎭座祭祀せられて居る。

この駒ケ岳に登るには、汽車による入は中央線日野春驛に下車し、野猿返しの絶景を下り、釜無川を渡り縣道を菅原村に進み白須にて道を左に曲り、竹宇尾白川畔の前宮に參拜して登る、いはゆる臺ケ原登山道と、釜無川を渡り縣道を横ぎつて駒城村にいり、横手から前宮に參拜して登る横手登山道との二つある。この兩道は往古馬を飼つたといふ笹平で出合ふのである。

笹平から、道は急にしゆんけんとなる。双渡り、前屏風の險をよぢ、黑戸山（二二二五四メートル）の北側密林中を經て屏風岩前の鞍部へ出る。五合目である。左は大武川の深溪を隔てゝ淺夜ケ崎、地藏岳を望み、右は大絶壁尾白の谷を越えて烏帽子、鋸のしゆんせうに對する、前面屏風岩ちよく立し隔たり、駒ケ岳の本體がう然とそびえて行手をふさいで、このしゆんせうを如何にし

て登るかを恐れしめる、こゝに二軒の宿泊所がある。

大御鞍石（東駒ヶ岳）

東駒ヶ岳の駒にまたがつた聖徳太子は従者九人を引連れ一行すべて十騎、富士山麓の吉田の郷に着いた。こゝから山に登らうとしてまづ諏訪森にいると馬背に鞍を置いた形の巨石がぎ然としてゐる。大御鞍石と稱へる（俗なまつてオメクラ石といふ）太古からこの郷の守護神と崇める所のものである。太子は馬をおりて一いうした。更にその隣地に在る一小きうに登つて富士山を遙拜した。をかはその昔日本武尊が東夷征伐の際駿河の焼津で火難を免れた報恩のため淺間の大神を拜した祭壇だといふのである。

淺間の大神（木花開耶姫命）は烈火のうちに三人の皇子を御産遊ばされたので、火防の神として安産の神として名高くおはします。聖徳太子の御母にいます後の宮は御妊娠の時淺間の神を尊信することが厚かつた。そのためか、宮室を御巡見の際馬屋戸の前でいと易く太子を安産せられた

厩戸皇子の名もこの故につけられた。今富士にお登りになるのもその報さいのためである。

裾野三里の森林中龍が馬場で脚ならしをした後いよ〳〵急傾斜の地點まで進んだ。馬はあへぐ人は危ぶむ、この時太子の馬は忽ち雲霧の中に消えた、驚いた供奉の九騎はあぶみを踏みしめてこれに縋かうとしたが山嶮しく路絶え剩へ大木巨根縱横に走つて、ひづめを容るべき間隙も無い。一同は聲を擧げて泣いた。太子樣よと號叫した。その聲を聞かれたのか、太子は復び雲霧を開いてお降りになつた。さて仰せられるには『我はこれより絶れうを極めんとす。されどなんぢ等の登り得る所にあらず、早く馬を返してなんぢ等が舊路にいれ、われ供奉の者を要せず』と言をはつて擧げた太子の一むちに天馬空を馳せて又その影を留めずなつた。今富士山北口の七合三勺に俗に太子室と稱する石室がある。これは厩戸皇子の舊跡だといひ傳へて居る。

又頂上には駒ヶ岳といふ一峰がある。そこへ登るには八子のはしごといふがかけてある、昔太子は馬でこのはしごをお登りになつたのだといふ。こゝに今でも黄銅で鑄た馬が石室造りの馬屋の中にそのさつそうたる雄姿を示して居る。

フジもアサマも噴火を意味する語で火徳を有する木花開耶姫命がこの山の守護神におはしますのはすこぶる自然の御事である。上吉田の火祭はこれに基くのだといはれてゐる。馬は陽獣にして方位では正南となり、時刻では日中となるので火(日)に深い關係のあるのはいふまでもない。現に火祭の時神輿を大御鞍石の上に奉安して祭典するのも、それがためであらうと思ふ。下吉田淺間社の祭典に行ふ流鏑馬でこの龍が馬場の故事を傳へたものであるといふ。

諏訪明神（鹽見岳）

過る頃二三の外人が南アルプスの鹽見岳へ登つて『この山は一萬尺に三尺だけ足りないから』とて強力と力を合せ岩石や土を集めて三尺高く盛あげ一萬尺にしたといふひやうきんなことがあつた。この鹽見岳については面白い傳説がある。

話は神代の昔にさかのぼる——交通不便の伊那の峽間の民は、その頃鹽の不足に苦しんでゐたそれを不びんに思召された建御名方命はある日たつた一人で間の岳に登らせられ『どこか鹽のでさうな所はあるまいか』と四方を見渡してをられると、麓の方、今の伊那里村と大鹿村のあたりに鹽の噴き出てゐる所が眼にとまつたので、早速山をおり村人にこの由を告げ、鹽水のくみとりを始める事になつた。

それから間の岳は鹽見岳と名づけられ伊那里村には鹿平、大鹿村には岩鹽泉と呼ばれる所が出來た、その後建御名方命は大鹿村に足を止めさせられてゐたが、ある日命は近くの山で大きな鹿を一頭射とめられ過ぐる日間の岳（鹽見岳）から見つけて置いた鹽の井をくんで調味されたのでこの地を鹿鹽と呼ぶやうになり、鹿鹽の住民は最近まで建御名方命をまつた上諏訪の諏訪明神へ祭典の時鹽づけにした鹿の頭を獻じて來たさうである。

雪の夜の女（鹽見岳）

白雪にかゞやく南アルプス鹽見岳山麓の鹿鹽山附近に殘る話——。

雪の夜——それはしんしんと音もなく降る夜でも、ぴつたりと雪がやんで青白く月がさえて雪

の曠原が紫に輝く夜でも、村の山道に美しい女が現れる。通行人にその姿が必ず見える。眞白い手ぬぐひをかぶつて居る。その手ぬぐひがひら〳〵と風になびくと黑髮をつや〳〵しいてふがへしに結つて居る、顏は雪の色よりも白い、つぶらなひとみ、眞紅なくちびる、紫色の着物。

女は、人が歩いてくると、その人の先になつて雪道をしほ〳〵と歩いてゆく、月光の美しい夜など女の全身に月光が降りそゝいで居る。そして、村近くまで來て、人家のともしびが雪の中に紅くうるんで見ゆる頃になると立ととまつて振かへる。につこりと笑ふ、くちびるからこぼれる齒が水晶のやうに光る、と、姿が消えてしまう。

村人たちは始めはこの怪異な女の姿に怖しがつて逃げたものだが、馴れるに及んで、女の姿が見えぬと物足りなかつたといふ、吹雪の朝だ、村の若者が吹きつける風と雪にたゝかれながら歩いて居ると、積つた雪の中に妙なものがころがつて居た、狐である。大きな狐だつた、それから、女の姿が雪道に見えなくなつてしまつた。

虛空藏山（鹽見岳）

鹽見岳の山裾に鋸の齒のやうに聳え立つ虛空藏山といふのがある。

世は麻と亂れる戰國時代に、武田信玄の家來に多田三八といふ怪力の武士が虛空藏山の城を守つて西方上杉の陣に備へて居た。

或夜の事。風雨もの凄く、四邊の樣子がなんとなく騷々しく、やゝともすると雨風に乘じて敵が攻め入りさうな氣配がするので、三八はひとり戶外に出て物見臺に上らうとした。

すると、何者とも知れず闇の中から突然三八の髮を掴んで冲天に引きあげやうとする。が、三八はすこしも騷がず泰然として腰の一刀を拔くや、

『やつツー』と掛聲諸共曲者の手を斬り落してしまつた。

すると不思議、雨風がやんで月が雲の切れ間から顏を見せた。曲者の姿はどこにも見當らぬ。が庭前には大鷲の足のやうな手が紅に染まつて虛空を掴んだまゝで落ちてゐた。

これを傳へ聞いた上杉方の陣では三八が鬼を斬つたといつて三八の武勇を賞めそやした。彼が退治したのはクハジヤといふ怪物ださうだ。

逆銀杏（鹿鹽浴場）

鹽見岳の山麓――大鹿村の鹿鹽浴場から約三十町、入澤井といふ所に銀杏の古木がある。銀杏には違ないが其枝は皆逆さにさがつてゐる。弘法大師が鹽の泉を作つた杖を突いて此處まで登られた、その杖を地につきさして置いたのが雪解の春先になつて芽ふき、この逆さ銀杏になつた。枝の出ぎわに乳房に似た瘤がいくつとなく垂れ下つてゐる。その皮を煎じて飲むと乳がよく出ると云ひ傳へて乳の出ない女はわざ〳〵遠方からその皮をとりに來る。

新轉柱（鹿鹽浴場）

入澤井の少し手前澤井の宮下氏の家には安倍晴明の火除柱といふのがある。昔晴明が此の地を

通行のみぎり、劇しいオコリを患つて、この家の人々から手厚い看護を受けた、晴明は謝恩の意味で折柄普請中の柱へ火難よけの新轉を封じ込んだ。以來その家は火事に會はない。遠近の人々はこの柱を切り分けて貰つて火除守りとしてゐる。又その家の人達は決してオコリをやまないさうな。

河合といふ所にある老松で臥龍の面影ある古木、人呼んで夜啼き松といふ。可愛い嬰兒が夜小きするとき、この松の枝をそつと床下に入れて置けば夜啼きが止むと言はれてゐるが、由緒の傳はらないは些か物足らない。

この村の猫には絶對に蚤が居らぬ。昔からの云ひ傳へであるが、今も實際で誠に不思議とされてゐる。この村から蚤のゐない猫の子を貰つて隣村で育てゝ見たら矢張り蚤がついたといふことである、面白い研究資料とならう。

大池の邊りに八頭の群れ鹿がゐて、何度獲人が獵つても又元の八頭揃つてゐたといふ話。などを鹿鹽の七不思議といふ。其他、あくなし蔵、樽元の大瀧、不吉知らせの茅、野ケ池の大蛇な

どと口碑傳說に富んでゐることは數限りがない。

戸臺部落（仙丈岳）

仙丈岳の登山路――戸臺の部落附近で聞いた怪異話――。

雪が降りやんだ靜かな雪の曠原に赤い火が點々とつく、赤い火はやがて動きだす、次第に山へのぼつてゆく、火の數が多くなると、火が消える、あとには白銀の曠野が水の底のやうな靜まりの中に殘る。「きつねの嫁いりだ」と村の人はいふ。これは、どこの村にもある話だ。

ある年の冬、村人が用事をすまして歸路についたのは夜も深んで居た、雪はびつたりとやんで居た、空には星がキラ〳〵と光つて居た、あたりは青白い雪明りに包まれて居た、山道にかゝる前に雪の曠野に赤い火がとろ〳〵と燃えて居る火葬場である、岡谷から歸つて來た女工さんが死んで朝葬式が行はれた、その死體が火葬に付されて居るのだ、火は雪の上にも赤く燃えついて居た。

もや〳〵と昇る煙、異臭、そして火のそばには臨亡魂の姿が魔のやうにうごめいて居る、燃ゆる火の中には、十八の娘の肉體が燒けくづれて居る、黑髮が火の蛇のやうに燃えて居るであらうと思ふと、野天の火葬にはなれて居るのだが氣味が惡いので火葬場の方を見ないやうにして雪道をいそいだ。

暫くゆくと、ガリ、ガリと異樣な音をきいた、思はず立すくむと、雪の中に一匹のきつねがうづくまつて人間の骨をかぢつて居るのだきつねの目がギラリと光つたと、思ふ瞬間、きつねは逃げだした、雪の曠野の中を一直線に――。

不思議！　きつねが走るにつれて、くわへて居る人骨が青い火を發して居る、そして、人魂が地をはふやうに青く燃えつゝ雪の野を一直線に飛んでゆくのだつた、村人は、反對の方向に走りだした。きつねは山へ逃げたのであらう、山へ、山へと青い火の玉ものぼつてゆく。

原始部落（十國峠）

わが國で人の住む場所で最も高い所の村が南アルプスの麓――千曲川の上流――海拔二千九百三十八尺といふ信州小海町から更に六里の山奥、十國峠の中腹にある。

北相木村字木次原村がそれである。

參謀本部の地圖で海拔千六百八十一メートル、約五千五十尺、そこに生活する十一世帯八十餘名の人々こそ、本邦領土における最高地の生活者である文明の訪れも、文化の惠みも更にない物物交換の生活で、現金の有難さを微塵も知らぬ。村の物持ちといふ市川馬吉と飯出竹藏の二軒だけが家らしいもので、その他は堀立小屋である。茅の屋根に、敷物は莫蓙が上等の部で、大抵は藁莫蓙の六疊一間、八疊一間の家ばかりそれも稼業の炭燒に男は山、女房は荷出しで殆ど留守だ。

相木盛之助といふ豪族がこの村の先祖、姫が岩を撫でて鏡になつた鏡岩、手植の唐松も現在して村の誇りの一つと見える。この部落には正月も幕も同じだ。山に出た日を山に送り其日の飯だけを食つて炭を燒く――それが生活の全部である。この部落のために出資するのは麓の炭問屋で、炭を運ばしては、米、味噌、醤油その他の日用雜貨と交換する。

この部落の炭は雜木で一俵六十錢、楢、柏など極上が一圓六十錢、そして正味五貫の俵を、出資者は四貫五百匁として受取る。坐りながらに一俵で五百目宛を儲ける譯で安からうが、高からうが、そんなことには頓着せぬ。其日の米、味噌さえ貰へばそれで滿足してゐる。現金を持つても使ひ途がないので、有難さを知らぬのも道理、勞働爭議も勞資の協調、思想の問題などこの部落では寢言のやうに思つてゐる。下界の人々は無智と笑ふであらうが、炭竈の煙の出具合に頭を惱ますのみで、そんなことは氣にも止めない順朴そのものの勞働者達である。

高原の部落にも、青春の若人の戀の血潮は湧く。それも下界の若人より眞劍があり熱がある。星寒き冬の夜二里位の山路で逢曳きするのは平氣の平左であると聞いては眞劍よりは悲痛である十五六の村の娘は誰も彼も『機械稼ぎ』といつて諏訪、高崎、群馬あたりの製絲工場に前借をして身賣りする二月から十二月の中旬まで年頃の娘の影は村に見えぬが師走に押つまると、町の土産をもつて、束髪や耳隠しに化粧した娘達が部落に歸つて來る勞働稼ぎに出た青年も同じ頃歸る僅か二ケ月あまりの村の生活に、戀の花が咲いて實を結ぶ。

蛇ケ淵（三岳）

南アルプス連峰のすそをはふ西野川の上流三岳に『蛇ケ淵』といふのがある、幾百とも知れぬ澤山の蛇が生息し、若い男女が附近を通りかゝると、必ず淵へ引つ込まれるといひ傳へてゐる。

むかし、この村の獵師の娘は、村の若者と戀をさゝやく樣になつたが、その後男は娘の髮の毛の赤いのをきらつて、他の女へ心を移した、娘は男の愛をとりもどそうと、髮の黑くなるやうに祈つたが『髮の毛を黑くするには西野川の淵の水で洗ふがよい』といはれ、暇さへあればそれを試みてゐたが間もなく男から欺かれてゐたのを知つた娘は二人の仲を非常にうらみ、わが髮の毛にのろひをこめてこの淵に切つて捨てた。

不思議や、その髮の毛は一つ〳〵に小蛇となり、娘の身體をかこみ淵の大穴にかくしてしまつた――娘はこの淵の主になつた、それから間もなくの事である、娘をあざむいた二人の男女はこの淵にはまつて死んだ。

農作暦（白峰山）

晩秋から初夏にかけて、日本アルプス連峰の雪が消えて來ると、白峰山に甲州地方から見た所に一匹の鳥の形の殘雪が見える。

秋にもまた雪が降り初めると鳥の形が出るので農民はそれを合圖に田植や稻刈りをはじめる。

そして、その鳥は鷄のやうなもので卵を三つ持つて居るといわれて居る。

奈良田村（白根山）

南アルプスの雄峰――白根山脈と相對する西山の奥に傳說の村、奈良田がある。

奈良田村の四十五戸は、いま全部深澤姓を名乘つてゐるが、こゝの舊家深澤鄙道氏の家には寶物として孝藏天皇御親筆と稱する。

雛波かたかすまぬなみも霞けりうつるもくもる朧月夜に

といふ歌が秘藏されてゐる、その外源義經が賴朝に追はれて陸奥指して落ちた時同所を通過したが兵ろうに不足し粟九斗を借用したといふ證文を龜井六郎の代筆であり武田信玄の花押ある、

『孝謙天皇天平勝寶巳丑則位後世十年法諱奉號法基尼當國川城郡奈良田遷居の由緒不可相違因鼓如先規山林畑民戸諸役分免許者也』といふ御墨付が、奈良田村孫左衛門尉あて名で殘つて居る。眞か、僞か――とにかくこの御墨付で明治に至るまで同村は無稅の地であつた。

村の東南、山の中腹に奈良王樣といふ祠がある。孝謙天皇樣を祭り、村人は次の樣な傳說を確く信じてゐる。

いつの頃からか、時は定かでない、この地に七軒ばかりやぶれ小屋があつた、そこにはあたりの山に出沒する熊、鹿、猿を友とし、えとするきこり達がさゝやかないとなみを續けてゐた。

天平寶字元年五月の中旬、長閑な日であつた、駒鳥が高音をはつてゐた、群猿もたわむれてゐた、突然きこりを驚かしたのは、澤山なお供をつれた天女の樣な美はしい貴人の出現であつた。

その頃奈良の都は女帝なる孝謙天皇の御治世であつた、天武帝の御孫大炊皇子とお仲あしく穩

かな日とてはなかつた、陛下には都を避けて吉野の里に隱れられたが、たま〳〵玉體にお惱あり信仰厚き陛下には諸々の神佛に祈願をこめられた。夢に白髮の老翁現れ『甲斐國巨摩郡早川在湯島の鄕に靈湯あり、諸病治せざるなし』と告げてかき消すごとくなつた、きこりを驚かした天女こそ、神のお告げを得て、富士川傳ひ、遙々吉野の里より道なき道をたどつて來られた孝謙天皇の一行であつた、供奉の人々は假りに宮殿を營み、御意を慰めまゐらせると共に帝には靈泉に浴したまふと二旬を經ずして全く平癒された。

一日御散策の折同地の地相をしみ〳〵と御覽あつて『この地へ來て始て奈良へ歸つた樣に思ふ山から川まで七段に出來て居り、切り立つた山が前にそびえ、ふもとを早川が流れてゐるところは、まことに自然のとりでを形ち作つてゐる、村下、早川に堤を作れば百萬の敵を食ひ止めることが出來る』と仰せられ、山代郡奈良田と稱する樣御命じあつたといふ、今祠のあるところは宮殿の跡といひ、供奉の公卿諸大夫の屋敷跡と稱するものも附近にある、この傳說に付け加へられた七不思議といふのがある。

一、二羽鳥、奈良田には鳥は決して二羽以上居ない、これは奈良王様が、この地に來るものは鳥けだものゝ末までも夫婦であらしめたいといふお考へからそうなつたといふ。

二、片葉のヨシ、鹽池のほとりにあるヨシは出たては兩葉であるが次第に奈良王様の森の方へ向つて葉が片よるといふ。

三、鹽池　天皇諸民の爲に井をうがち給ふとそこから鹽水が湧出したと傳へられる、つひ先年までこの井戸水から鹽を取つたり村民の煮物用に使はれてゐた。

四、ビンロウジ染池　天皇御衣の料を染めるため祈らせ給ふと傳ふ、永い間村民の染色に用ひられた。

五、御手洗湯　天皇若宮御參詣の節洗はせ給へばその水湯と變ずる。

六、洗たく池　何程あかついても落ちざるものがない。

七、御符水　皇居の跡に御硯井あり、諸病に卓效ありとし腹痛等の場合は村民必ずこの水を用ひてゐる。

大日岩（鳳凰山）

鳳凰山の奇觀は絶頂に聳立する大日岩に盡きてゐる。これと甲府盆地を隔てゝ相呼應してゐる金峰山頂の五丈石は、近寄つて見ると横に長い岩の堆積で、遠望したほどに見立てがない。しかし、大日岩は二つの大岩柱が互に寄り合つて堅に尖立してゐるので、驚嘆に値するものがある。

大日岩なる名はこの岩を大日如來と崇めた爲である、高山の絶頂に大日如來を勸請する例は少くないやうである、白峰の北岳の頂上にも大日如來の小石祠がある、大日如來は卽ち法王であるからこれに禽中の王である鳳凰の二字を當てるやうになつたのであらう。

それが何時の間にか子育地藏などゝ附會されて地藏尊となり山も地藏岳と呼ばれるやうになつた。鳳凰山には初雪又は雪解の候に黑い岩が牛の形に現れる場所があつて、これを農牛と呼ぶさうである、麥蒔や苗代の頃だからであらう。

地蔵岳（悪澤岳）

悪澤岳は赤石山脈の最高峰でありながら、つい十二三年前まではその存在さへ知られてゐなかつた。田代方面では地蔵岳と呼んでゐる、何でもそんな形をした岩がある爲だといふ。

頂上は餘り廣くはない。大きな岩があつて鐵製の御幣が建てゝある。直ぐ下には東北に向つてカール狀の窪地があり、八月頃まで雪が殘つてゐる。元來岩山であるが東側は特に巨岩がごろごろしてゐる。頂上から北に派出した尾根には小さい悪澤の池があり、西俣の櫻島からこの尾根に取付いて直接頂上に出られる。高山植物は豐富で稀品が少くない、長之助草の多いことも特色の一つであらう。

白雪の山容（農鳥山）

南アルプスの白峰山は幾峰にも分れてゐるが農鳥山は高さに於て、姿態に於て白峰全山脈を代

表して居る。

春の殘雪、秋の初雪、農鳥山の頂上から直下、少しも左右に偏せず鳥の形が見え初める。農鳥といふのは鷄のことだ。無風流な農民はシヤモの雄鳥が立つてゐるやうで、段々雪が解けると尾が消え、體がむしられ、鋤のやうな形をして消えてしまふから鷄だと說明して居る。だが、白い鳥は消えても注意して見ると岩壁いかめしい赭色の農鳥はいついかなる時でも、おそらく山が存在する限りは見えるであらう。

一說には農鳥といふのは、農鳥山の麓近い澤に雪の消えた跡に黑く出る岩で卵を三つも持つて現はれるからだともいふ。

雪が生む名（白峰山）

日本アルプスの山の名は雪の形によつて生れたものが多い。

翌粉谷の水脈から長く曳く白蝶の姿が現はれるので蝶ケ岳、天馬空を行かず山の肌にとゞまつ

て刻印するので白馬岳などのやうに——。

祖父ケ岳には種蒔き爺さんが笈を持つたやうな姿が現はれる。山腹に雪解の頃、偃松が先づ爺さんの形にはびこつて出るのではないかといわれて居る。

白峰山の名も雪から導かれた名であらう。實際南アルプスでは、白峰が雪の來ることも早く、殘雪も多量であつて、最高峰北岳の北側にある大樺谷の如きは盛夏でも數條の長い雪渓が懸つてゐる。間の岳にも頂上の東から北にかけて雪田が見られる、これは十月になつても消えない。

金賣吉次（神坂峠）

神坂峠への路は遠いが、しかしすてきな霧の朝だ。

いまさしかゝる冷々しい陽ざしに霧のしぶきは頬をぬらし夜をうるほす、その霧のなかにやがてうつすらと浮き出てくるのが赤紫のアケビの花だ。

神坂越えてくりや

アケビの口に
つるべ落しの
陽がのぞく

には季がちと早い、がアケビの花はわづかに殘す路の斷崖に無數の房をつけてゐる、藥に露花につやゝかな朝の氣。

萩も咲いてゐる、桔梗もおみなへしも咲いてゐる、枝から枝への小鳥の姿も——山はもうすつかり秋だ。

秋のさびしさに峠は荒廢しきつてゐる、いまは、ほとんど通ふ人もない、神坂峠に物好きな旅人がおとづれる。

神坂は、下伊那郡智里村大字園原にある、伊那から木曾路に出て美濃に通ずる昔の峠、上り一里半、下り一里半ある。

神坂越は神代において開發されたるものであつた、その全盛を極めた時代は、上代における木

曾路と信州とが浚交渉であつた頃だつた、神坂越はまつたく山道の關門であつた、それがやがて木曾路が開發され鎌倉街道が開通し木曾路の全盛――清内路越や大平越が行はれるやうになつてから――神坂越は衰微しかけた。

それでもまだ中央線や伊那電が開通しなかつた頃までは、神坂越が行はれた、そして美濃から伊那へ、伊那から美濃への物資の輸送に、馬方達が秋なれば釣瓶落しの陽にせかれつゝ馬を追ふのに賑はつた。

神坂峠の麓なる園原が幾多傳説の地であることは、神坂越えが古くから開かれてゐる、諸國の旅人が繁く通行したことでも分る、日本武尊も通行された、源義經も誰々等々通行した、それから、澤山の英雄豪傑が通行してゐるがそれらの人々の足跡に、いくつもの奇しき物語りを殘してゐる。

傳説のうちで一番多く、そして、興味のあるのが金賣吉次の傳説だ、此の山の奥に住でゐた炭焼き吉次が、黄金と美しき姫に、まつはる物語りは、いまでもこの荒廢しきつた神坂峠を、は

なやかに彩つてゐる。

義經の供をして奥州路へ落ちたといふ金賣吉次は、また炭焼吉次ともいはれてゐる、炭を焼いて暮した吉次が、やがて美しい姫を妻とし、そして長者となつて『伏屋長者』と唱へられた、會地村駒場の長岳寺に『長者免許』といふのが藏されてある。

京都のある公家に一人の姫があつた、ある夜夢に日頃念じてゐる住吉樣が現はれて『信濃國、園原の里に吉次といふ若者がゐる、そなたはそこへ行つて夫婦になれ、行末は大變幸福になる』とのお告げがあつた、姫はこの夢を三晩續けて見た、姫はやがて園原に吉次を訪ねて夫婦となつた。

それから吉次の家には好運がめぐまれた、ある日、半焼の炭を神橋に供へて住吉樣だと思つて念じてゐると、それが一時に光り輝く藥師如來の姿と變つてゐた。吉次は次第にふえて行く黄金を馬の背につんで京に送つて小判に替へた――吉次の住んでゐた長者屋敷の跡といふので、今は園原の入口の右手に桑畑となつて殘つてゐる、藥師如來は現在、園原への途中、會地村駒場の長

岳寺に姫の着た小袖の一部と共に殘つてゐる。

ある日吉次は、妻から預かつた小判を持つて駒場へ買物に行つた、その途中、阿智川の淵に一羽の鶴が遊んでゐた、吉次は小判をなげつけると、鶴はいづくともなく逃げ去つた、吉次はしほしほと家へ歸つて來たが、數日後の朝、吉次は燒けた炭を竈から取り出さうとすると、中には炭はなくて山のやうな黄金が輝いてゐた――鶴のゐた淵を鶴卷淵といつてゐる。

國原を神坂峠へ登つて行くと、御坂神社の下方に二本の松が聳えてゐる、國原の里へ射す朝日はまづこの松に射すので朝日松といふ、その松の根元に金雞の跡がある、伏屋の長者が都の方へ引越す時、秘藏の金の雞をこの樹の下へ埋めて置いた、その後、毎年正月元旦にはこの樹の下で雞の啼き聲がするといひ傳へられた。

國原に吉次を訪ねて來た京の女は、醜い顔であつた、が鏡がないので自分は美しいものと思つてゐた、國原で吉次に逢つた女は、吉次が眞黑い顔の炭燒であつたので力を落してふと振り向くと、傍らの池の面に自分の顔が映つた、女はこの時はじめて自分の醜いことを知つて諦めて夫婦

になつた、女が我が顔を見て驚いた拍子に投げた柳の杖は、斜に池に挿さつてそれに芽が生えた――姿見の池といふ、池とは名のみで今は田甫にせばめられて、あるかなきかである。

國原名物の一つの『箒木』は遠方から見ると、箒のやうにも見えるとて名付けられたといふがこれにも一つの傳說がある。

京都からはる〴〵吉次を訪ねて妻となつた姫は、都戀しく、わけて慈み深い母親が戀しく、山へ日の入る故郷の方を心に拜む日が多かつた、ある日ふと、背戸へ立つて眺めると、向ふの山ふところに母の手招く姿が見えた、姫は懷しさに驅けよつて見ると、それは母親ではなくて一本の樹が風のまに〳〵枝をゆり動かしてゐたのであつた。それからこの樹を『はゝき木』と呼んだ。

國原は、昔一度荒廢したことがある、現在の國原は、今から二百年ばかり前から出來たものだなどゝ云はれてゐるが、下伊那郡伍和村の手羅尾に國原氏を名乘る一族は、國原から移住した吉次の三弟橘内の子孫だ、とも云はれてゐる、吉次の二弟橘六は、大阪の角倉家の祖だとも言はれてゐる。

神坂峠と、そのふところの園原には、幾多の傳説を藏してゐる。

手力男命（冠着山）

筑摩野の東端を劃り聖四阿屋とともに筑北の谷に鼎立する冠着山。

その圓い柔かい發音にその文字の感じに、何か心を引く、そしてローマンチックな印象を與へられる。恰度、奈良の若草山を圓々させたやうで、群山の上になだれて坐にその姿を見る時、一層强く印象づけられる。

時は神代、天岩戸の扉を擔いだ手力男命は、雲の上をどんどん駈けて來た。再び大神の御威光の、天地の隅々までも行わたるやうになつた喜びに、命の心は一ぱいであつた。遙か下界の茂り合ふ山々も、咲き亂れた野の草花も、明るい天地の光りに輝き合つてゐた。命は嬉しさに猶も勇んで駈け續けた。その中に少し疲れたので、下を見ると美しい山が見えたのでそこへ下つて休んだ。

雪の峰から吹いてくる凉しい風に汗を拭ひながら清いそれらの連山や、豐に流れる河の光りを見つゝも安堵と歡喜に自ら微笑まれるのであつた。——眞晴になつた時の驚きと悲しみ——天安河原で神々達の評定や——思兼命の考へ——色々の心配の大きかつたゞけ、今の喜びは本當に有難いのであつた、そして命は、扉を何處かへ納めて了はふと思ふのであつた、亂れた着物を直し傾いた冠を正して益々崇高な心持になつた命は、何處か此の大自然の地に扉を隱そうと考へたのである。

やがて命の扉を隱した山は戸隱山と呼ばれ、冠を着られた山は冠着山と呼ばれた、その後、有爲轉變の世に、默々として聳え或ひは月の山と稱へられ或は姥捨の古話を生み、扨ては今の永井の安養院は此の峰に在つて爲に一名方丈の山とも言はれ、今も鳥居の平池の平などの場所があつて、池や古井戸等が存して居る、頂きには石祠、御堂等がある。

青くらべ（八ヶ岳）

八ケ岳は、日本アルプスの人氣者である。

冬は雪に清められて碧空に屹立し、春から夏へ、氣のはやい登山者が押しかける。黄色のしやくなげをはじめ、高山植物など可成りに多い。秋のもみぢは見る人のないのがをしい。

その昔、八ケ岳は日本一の駿河の富士山より高かつた。或る時富士の女神（淺間神社）と八ケ岳の神様（權現神社）とが高さを爭ひはじめた、八ケ岳は女に負けてたまるものかと口を極めて富士より高いことを主張した、ところが富士の女神もさる者、何と言つても承知せず八ケ岳に食つてかゝる。

『では致し方がござらぬ、兎に角阿彌陀如來に仲裁を頼まう』と言ふことになつた。

阿彌陀様は言つた。

『それは困つたことぢや。が、仲裁するなら公平にせねばならぬ。で、水は正直者だ。平なら何れへも流れぬ。然し、少しでも低い方があればそれへ向つて流れる。わしはお前達の頭から頭へ樋をかけてやらう。』

如來は苦心して八ケ岳の峰から富士の頂に樋をかけた。そして、その樋へ水を流し込むと水は八ケ岳から富士山の方へと流れて行つた。

『爭ひすることはない。女神よ、お前の方が低いことは明かになつた。』

富士はとうとう高さに於て負けたことになつた。だが、氣荒な女神は、負けたごう晴らしに、

八ケ岳を足蹴にした。すると忽ち頂きが八ツにこはれて、現在の權現、編笠、四嶽、旭岳、中岳、阿彌陀、赤岳、横岳の八ツの峰をつくつたといふ。

この話は、昔八ツ岳が大噴火をする前、非常に高かつたといふことを物語るもので富士の女神が足蹴にした時に八ツになつたといふことは噴火を暗示したものであらう。

南の家（八ケ岳）

八ケ岳の裾が更にいくつもの丘や松林や雜木林やを抱いて釜無川の方へすゝむ途中の日當りの

いゝ處に「田端」といふ部落がある。こゝに姫君の物語が殘つて居る。

姫君が不義の子を妊娠して、きつい勘當にあひ、只一人とぼとぼと、たどりついたのは田端の豪家南の家であつた。

殿樣の姫ともあらうものがいかにきつい親の怒りとはいへこの村を訪れた時は全くたゞのひとりであつた、美しい着物をまとつてはゐたが、幾日となく充分に食物もとらぬと見え、心の惱みと疲れに亂れた髮の中から夢のやうに浮いた姫の面はやつれはてゝゐた。だが、もともと血筋の正しい姫君、土にまみれた山の人達には京美人のやうにたゞ美しかつた。

村人が集つてあれこれと物問ふても、姫はたゞかすかに絹づれの音の聞える紅い振り袖に顏を押し包んで、さめざめと泣き入るのみであつた。

おゞれる御殿の暮しから土臭い茅屋、百姓の一室に起居する樣になつて、はじめのうちは周圍の者も涙にさそはれる程變つた生活だつた。寡る淋しさ悲しさに、日ねもす、夜もすがら悶え泣く姫を見て、慰めの言葉さへなかつた。

暮に馴れて來ても、姫はたゞ獨りだつた。村の子供が近かづいても、親しい交りにはどうしても入れなかつた。たゞ、衰へはてた生白い皮膚の底にをどる、わが胎兒のことのみで明け暮れは過ぎ去つて行つた。

この姫に一つの友が出來たのは數ケ月後であつた。「南の家」に一本の古い梅の樹があつてその下に大きい石があつた、姫は誰と交はり、誰と語ると言ふこともない淋しさから、いつしか梅の樹と大石とが唯一の友達になつた。隙さへあれば石の上の梅の木を、眺めて坐居た。花が咲き、青葉になつて、梅の實が葉がくれに見受けられる樣になつても毎日こゝで遊んだ。

梅の實も熟して落ち、いつか裾野の秋も丘も芝生にすだく蟲と共に深んでゆく頃、姫は男の子を生んだ。だが、ながい間の惱み悶えから、身體が衰へお產が重かつたゝめ、產の疲れに生命をとられた、そして嬰兒もやがて後を追つた。

村人は泣いた。いかに不義の子を妊娠した姫とはいへ血をわけた者の一人も居らぬ見知らぬ村に來て死んで行く運命を悲しんだ。そして二人のなきがらは生前姫が愛した梅の樹の根元へねん

どろにとむらつた。

やがて、草木もすつかり枯れて冬に入り、すゝり泣くやうなこがらしが、こゝら一帯に吹きつづいた。

その後、間もなく村人達は姫の石碑を建てた。姫がすき好んだ石の上に祠をこしらへ、下には石燈籠を二つ刻んだ、今もなほ『享保十乙巳年六月吉日』とある。村人達は思ひ出す度に香花をたむけ、参詣して冥福を祈つてゐる。

姫が持参して來た、量付の入つた小くさは南の家に保存されてゐたが、五十年ほど前の火災に、焼けてしまつた。

大蛇昇天（八ヶ岳）

八ヶ岳は昔、千年も年を經た雌雄二疋の蛇がすんでゐた。大蛇は千年經れば山から海へ出ねばならない。

九月末のこと、八ヶ岳の空から暴風雨が吹き出した、風は猛りすさび、強雨は横なぐりにたゝきつけた、電光はきらめいた。

夜、凄じい物音が起こつた。八ヶ岳の山くづれ襲來である、地をふるはして、下へ、下へと押し流されて行く濁流がかすかに白く、強雨、強風の闇の底に見られた。

水は西の澤部落を襲つた、家が流れる、人が溺れる、土藏が倒れる、松の大木が根こそぎになる。

恐怖の夜あけである。暴風雨は止まなかつたが、その、暴風雨の眞只中に奇怪な二つのものが空を飛んでゆくのを人々は見た。

蛇だ、恐ろしい二匹の蛇だ。蛇は大雨の中を泳ぐやうに走せて日本アルプス高嶺の上を雲に乘つて飛んでいつた。

蛇が龍になるには二千年かゝる山に千年棲んで『じや』になつて海へくだる。海で千年住んで龍になるとはじめて天へ登るのである。八ヶ岳に千年暮した蛇は大雨をふらし、山崩れのつなみ

にのつて海へくだつたのだ。

その怖ろしい姿を土蔵で助かつた人々が見たといふ。それから八ケ岳は荒れなくなつたさうだ。

女夫松（八ヶ岳）

お盆お盆と待つのがお盆、お盆過ぎたら何待たう――その頃八ケ岳山麓青松原の踊りの場で美しく若い評判娘のおたつも、毎夜さそはれては村の盆踊りに出て若者達の悩みの種となつてゐた、そろうた――そろうた――編みがさが、そろうた――歌へお十七聲張りあげて、胸の蓮花の開くやうに――歌が、段々碎けて踊りに油が乘つてくる。

さけば散るよとさかずに置けば、いつもつぼみで葉の影に――音頭とる人、橋から落ちる、橋の下でも音頭とる、――娘は踊りつゝ、ひよいと歌ひ方の若者を見た、若者も彼女を見返した そして踊る時には時々ふたりの肩や手がふれ合つてゐた――まもなく彼女はあれほど恥かしくて歌へなかつた盆踊りの歌を、お盆お盆と待つのがお盆――と小聲で口にするやうになつた。

山々の青葉が紅葉に變るたそがれ時、彼女は突然嫁いりせねばならぬ身となつて遠方にくれたそれは若者の情でただならぬ身となつてゐたからである。『何としよう』悩みは新たとなつて毎日もだえ苦しんでゐる、その頃若者の身にも思はぬ變事が起り、さゝいのことから旅の武士のために無禮討となつて果敢ない最後をとげた、この事を聞いた彼女も若者のあとを慕つて自害しつぼみの花を散らしたのである。

村の人々は、若者を埋めた傍から同じやうに今度は女松がひよつこり生えてゐたのに驚かされた、うはさはうはさを生んでいまだにのこる女夫松――夜明けの鳥がなくまでも、堅い約束石山寺の、石の土藏がくさるまで――今も村人は松をめぐつて踊り興ずる。

本澤温泉（八ヶ岳）

八ケ岳の横岳の山中に本澤といふ温泉宿がある。

秋――山に雪が來る頃になると、宿の人々はみんな矢ケ崎の本家へ歸るのである。しかし家具

のほとんど全部はこの山中の一軒家に殘してゆく。

だから、留守番を一人とめて置く。

けれど、十一月から翌年の三月の半年の間である。語る人も、見る人もない。雪と雪とにあけ暮れてゆく深山の一軒家だ。

夜――空には綺麗に星もきらめいてゐる、山はたゞ靜寂だ、闇の底に谷川の音がさわさわと高く聞える、空氣は凍つたやうに動かないさびしさ。

晝――林、森が巨人のやうにつゞくのみである。

秋に留守番を一人殘していつて、春が來て溫泉に行つてみると、年々、それが無事でゐる事がない。

ある者は首をくゝつて自殺して居た。別な男は傷いて死んで居た。ある者は廣い板敷の部屋に横死して四邊に石油がしみ死者の衣物がこげてゐた、或は爐に半身を燒いて無殘な姿を見せてゐたと云ふ。獵に來る者の殘虐が敢てした事か、魔の業か。何れにしても悲慘な人の子の運命ではない。

ないか。その人々の心はどんなであつたであらう。眞の孤獨、長い月日を語る人もない眞の寂寞、頼るべき力も知らぬ眞の孤立そんなものが人の生命を脅したのであらうか。人をして恐怖に堪へざらしめる自然の狂氣がそこに至らしめたのであらうか。或は病苦に生を傷んだのであらうか。何れにしても無慘な物語であり、また考ふべき事柄ではなからうか。

姫湯（八ヶ岳）

八ヶ岳の麓の山里に、昔、姫湯といふ形ばかりの湯宿があつた。

武田信玄の家中で智將として名高い、勝本大藏之丞文家の息女、小織姫は、その花を欺くかんばせと優しい心ばえから、家中の若侍といふ若侍の等しく想ひ憧憬れる的になつてゐた。

人の世の甘く惱ましい春は何處にも訪づれて來る。深窓に人となつた小織姫にも、いつしか戀の芽が培かはれるやうになつた。それは同族勝本勘解由の一子で豐千代といふ、信玄お氣に入りの小姓頭であつた。

豐千代は殿中随一の美貌、小織姫とはいふまでもなく好一對――それ丈に、この戀の噂が立ち初めた時、家中の若い人々は一様に掌の内の珠を取られた如く二人を羨み、嫉んだ。そして、さうした噂を尾ひれをつけては吹聴し廻つた。

やがて二人は、お家の法度として不義の咎めを受けねばならなかつた。

――だが慈悲深い信玄は、この前途ある二人の命を、むざと斷つには忍びなかつた。二人は追放の處分だけで赦された。

流浪の身となつた戀の二人は、やがて小織姫の乳母が情けで、乳母の生れ故郷、鷲宿の里へと落ち延びて來た。

日蔭者の佗しい朝夕が、二人の上に幾日となく流れて行つた。

その頃、信玄は越後の上杉謙信と川中島に戰端を開いてゐた。風の便りにこれを聞いた豐千代は舊主の鴻恩に報ゆるため、又一つには不義の汚名を雪がんものをと、愛する小織姫を一人殘して密かに川中島へと馳せ參じた。

豐千代は嘗て其美貌と共に劍道の妙技をも家中に謳はれた者。彼は今甲斐勢の陣中にあつて、敵軍に見ゆる度び度び奮戰を重ねた。

だが、運命は豐千代につれ無かつたのであらうか、彼は亂戰の中に數ヶ所の深傷を負ひ、再び武人としては起てなくなつた。彼は涙を呑んで鷲宿の里へと歸つて來た。

姫は、傷ついた良人の平癒を神かけて祈るため、村の鎭守へ二十一夜の祈願をこめた。

その滿願の夜である。『御手洗鉢の下を掘つて見よ』といふ神託を、姫は夢うつゝの間に聞いた。

翌日、姫は早速鎭守の森へ行つて、村人の援けを借りながら御手洗鉢の下を掘つた。すると、そこから溫かい湯がこんこんとして湧き出て來た。豐千代はこの靈湯に浸つて幾許もなく本復した。

――後、村人はこの湯を名付けて姫湯と呼ぶやうになつた。（をはり）

昭和五年七月七日印刷
昭和五年七月十七日發行

山の傳說（日本アルプス篇）　定價一圓八十錢

著作權所有

著作者　青木純二

發行者　土屋泰次郎
東京市麹町區麹町三丁目三番地

印刷者　日永悌三
東京市麹町區有樂町一丁目一三

印刷所　株式會社恒有社
東京市麹町區有樂町一丁目一三

發行所　東京市麹町區麹町三丁目
振替・東京七八四七番
電話・九段六六〇番
丁未出版社

中根榮著

櫻井肉彈大佐裝幀並序文

犬もの がたり

本書は、犬行脚、犬小品、シエパード篇、雜の四篇を含む。

犬に關する著書として本書の如く趣味豐に且つ文藝的價値あるものは、今日まで他にその比を見ないのである。全篇を通じて流るゝ人と犬との情味ある物語は、家庭子女の情操を養ふに充分であり、更にその輕いユーモアは隨筆としても大なるものである。

四六判上製（裏紙木綿印刷）　コットン紙三八六頁
口繪（コロタイプ朝倉文夫氏作品）　寫眞四枚挿入
定價壹圓八拾錢　送料十二錢

櫻井忠溫著　世界的名著

肉彈

定價壹圓貳拾錢
送料拾錢

同　肉彈姉妹篇

銃後

定價壹圓五拾錢
送料拾錢

578
290